

# 放送人の会

No.85

2019.9.20

〒102-0094 千代田区紀尾井町1-1 千代田放送会館 3階 Tel & fax 03-3221-0019 Mail [info@hosojin.jp](mailto:info@hosojin.jp)  
 発行 一般社団法人・放送人の会 会長 今野 勉 編集担当 伊藤雅浩 (広報委員長・編集長)、菅野高至 (HP担当)、  
 鈴木典之、逸見京子、藤田知久 (カメラ担当) 松尾羊一 事務局 千葉邦彦 須齋恵美子

## 「わがこと」としての地方

放送人の会 会長・今野 勉

今年の11月16日に大阪で開かれる第39回「地方の時代」映像祭での記念講演と、それに基づきシンポジウムのパネリストを依頼されお受けした。

この機会を利用して、「放送人の会」の理事や地方会員の方々と交流を計る会を大阪でやるのかと考えて、一、三人の理事に相談してみたいところ、「地方の時代」映像祭と並行してやるのはかなり難しい、ということになり諦めた。

放送人の会は、「放送人の証言」や「名作の舞台裏」など、様々な事業を行っている。それらの事業の中に「地方との交流」というのも掲げられているのだが、これまできちんと行われたことがない。

「日韓中テレビ制作者フォーラム」が日本で行われた時は、あえて開催地を地方都市にしてその地の理事や会員のお力を借りてきた、という事実はあることはあるのだが、数は少ないし(日韓時代の対馬、日韓中になってからは福岡、札幌、横浜)、そもそも目的が違っ

### 「わがこと」としての地方

そういう、じくじたる思いもあって、「地方の時代」映像祭の記念講演のタイトルを、「わがこと」としての地方」として、主催者に送った。

私事になるが、テレビ業界に入って、ADから始めたディレクターの仕事は、今年で60年目になる。その間、私にとってテレビは「わ

がこと」であった。ひるがえって、私自身の生涯を振り返ると、生まれは秋田の農村で4歳で北海道の夕張炭鉱に移住し、大学は仙台だった。

大学卒業後は、ずっと東京住まいだが、その間、旅番組「遠くへ行きたい」など、様々な番組で地方に出かけ、46道府県すべてに足を運んだ。ふるさと夕張の炭鉱がガス爆発で廃山の恐れが出た時、東京に住む夕張出身者で「東京夕張会」を結成し、ふるさと応援活動が続けて30年になる。私は今、その会の三代目の会長を務めている。かつて11万人いた夕張市は、その後の財政破綻などもあって8千人に人口を減らした。

そんなこともあり、人生の老後は、北海道に住もう、と決意し、30年前北海道に別宅を作って東京と往來する生活をしてきたのだが、30年経っても移住できないでいる。理由は、私の仕事の中々終わらない、ということ、北海道という地方の冬の生活は色々な意味で厳しい、ということにある。

### テレビにとって「地方の時代」とは 何なのか

「地方の時代」映像祭で、何を話すかについて、今は思い悩んでいるところである。

「地方の時代」映像祭を始めたのは「放送人の会」を私も含めて立ち上げた何人かのテレビ制作者の一人、村木良彦である。今年で39回目、ということは、「放送人の会」よりも18

年も早い、ということだ。

「地方の時代」という言葉に村木は何を託したのだろうか。

東京に比べて恵まれない環境にあつて、秀作を作っている制作者に光を当てたい、という思いもあつたであろうし、更には、これからは「地方の時代」だ、という思いも込めていたのかもしれない。

しかし、わが「放送人の会」の地方の理事や会員から伝えられる民放の地方局の現状は、想像以上の厳しさだ。

「地方の時代」映像祭が始まって、一時はバブル景気であつたが、すぐにバブルははじけ、デジタル化の経費が重くのし掛かる時代を何とか切り抜けた後、更にリーマンショックに襲われて疲弊し、現在に到っている。

すでに私たちは、制作予算ゼロというドキエメンタリー枠を、涙ぐましい努力で必死に維持している地方局もある、という報告を聞いている。

なまじの希望や楽観論では、この現実を受け止めることにならないことは、解っている。

「地方」の声を、「わがこと」のように聞かねばならない時が来ている。今年はいくつか「日韓中テレビ制作者フォーラム」があり、年末には他の事業も続いている。

なるべく年明けの早い時期に、地方の理事や会員の方々と交流の会を持ちたい、と願っている。

# 情報交換交流プロジェクト

今期新しく「情報交換交流」のプロジェクトが生まれ、手始めに全国各地の会員の声を広く集め、活動の方向を探ろうと考えました。以下はそのために執筆を依頼した各地の会員からの発信です。

## 熊本城復旧

秋田和典

今年の5月、九州に出かけた折に熊本城を訪れました。復旧の作業が進みつつあるとはいえ、長塀や櫓の石垣の崩落の様子を見ると熊本地震の酷さが伝わってきます。城内には数多くの印がつけられた石垣の崩れ石が集められて保管されている状態でした。それでも天守閣の外観は着々と復旧が進んでいて、今年の10月には大天守外観復旧記念の特別公開も予定されています。

およそ400年前に熊本城を築城したのは、尾張の国出身の武将加藤清正です。加藤清正は築城の武将とも呼ばれていて、名古屋城の石垣を手がけたことでも知られています。そんな縁があって名古屋と熊本の交流の企画も進められています。

愛知の劇作家山川里海さんの加藤清正にちなんだ新作狂言を熊本城内で上演して、出演する愛知の児童と熊本の児童との交流も図ろうとするのです。

この夏休み、稚中中の小学校を訪ねると、河童の役で出演予定の児童8人が能楽師の指導を受けていました。ふだんとは違った体の動きもそれなりに楽しんでるようで時折歓声もあがっていました。熊本での上演に対する期待も高まっているようです。

熊本城の復旧にはまだ20年近くかかると思われていますが、市民の心の中で生き続ける城に対する愛着が城の復旧を始めとする様々な活動を支えているような気がします。(ラジオディレクター)

\*\*\*\*\*

## 地方開催放送人祭り

曾根英二

放送人の会の愉しさは何といっても先輩たちの蘊蓄を開けるにあるように思う。中でも日韓中フォーラムの酒を持ち寄つての夜会は殊更だった。遠慮気味にうかがっている自分を何時の間にか開放してテレビマンとしての幸せや苦しさを語っている自分に気づく。せなひと時である。

放送人の会で会員の交流の場や機会を充実させようという試みが進行中と聞く。大いに賛成だ。地方の岡山にいる者からすると、どうやって長い日本列島を上手に使って催しに参加できる機会を作ることができぬかにかかっているように思う。

総会とグランプリ発表、パーティーは従前の東京とする他に、地方開催の放送人祭りのものを作るなんていうのはどうだろうか。祭りだから多様な発信をする。開催地の放送人のアイデアで映像番組の視聴とシンボをやる。日本の縮図のような地方をまな板に載せてみるもよし、現場ツアーもよし。おまけに開催地の現役テレビマンとの交流もできる開かれた催しを考えてはどうだろうか。

SNS時代であるFACE BOOKですでに多くのフォロワーがついている放送人もいる。元気の源はよく喋ることと言われるが、未来に伝えるべきものをみんなで耕してみてはと提案したい。FBと地方祭り。

祭りは伴侶同伴、孫同伴も大いに結構。例えば岡山 新幹線の車内放送に「Mototaro Line」と響く。「ええ、吉備線のこと」、対岸香川にも桃太郎伝説の島々、そして産廃と闘った豊島。住民の戦いに民主主義を考える。映像が社会を動かす。瀬戸内の魚で一献。愉しそうだ。

\*\*\*\*\*

## 仙台で放送人GP受賞作の上映会開催

木村成忠

放送人グランプリ2018で優秀賞を受賞した『ゴンザク世界最初の露日辞典を作った男』の上映会を仙台で行った。漂流民がらみの露日辞典編纂という史実は215年前の仙台藩でも起きている(薩摩のゴンザクの64年後)。仙台藩の漂流民は石巻若宮丸漂流民という。私がTBC東北放送のラジオ制作部に在職中ラジオドキュメンタリーとして二度番組を作っている。昭和59年の国内編と平成7年のロシア・露日辞典編である。

「ゴンザク」の番組をぜひ見たいと思ひ、制作社BTVの常岡真衣ディレクターに手紙を書いたところ、常岡さんはすぐに番組DVDを送って下さった。この作品は日本国内とロシアの取材ポイントをしっかり押さえ、見こたえのある番組に仕上がっていた。

このすぐれた番組を地域の人たちに見てもらいたいという思いで番組上映会を企画してみた。BTVの常岡さんに相談したところすぐに許諾が得られた。

上映会は平成最後の日曜日平成31年4月28日仙台国際センターで行った。広く一般にも呼びかけ、ネットでも紹介された効果か、参加者は約50名、東京からも2名の参加があった。アンケートには「ゴンザクの名は耳にしていたが、内容は初めて知ることばかり。石巻若宮

丸漂流民についても知りたい」などの感想が寄せられた。他にも若宮丸漂流民のことを知りたいという声があったので、私が25年前に作った番組の聴取会・講演会を9月21日宮城県塩釜市で開催予定である。(仙台市在住)

\*\*\*\*\*

## 戦争報道の継承

村上雅通

昭和天皇の拝謁記、二・二六事件、日本新聞、ガダルカナル、朝鮮戦争等々、この夏の戦争に関するNHKのドキュメンタリーは見応えがあった。「二・二六事件」では、反乱軍、鎮圧軍の双方の元兵士まで採し当てた。100歳を超えた元兵士が、83年前の状況を昨日のこのように語る様子は、まさに奇跡的のしか言えない。資料の発掘・分析とともに、制作者の取材力には脱帽だった。調査報道の神髄を見せつけられた思ひだ。

一方でローカル民放は…という、戦没者の追悼式のニュース以外、戦争に関する企画はほとんど見られなかった。具体的な数を調べたわけではないが、この数年で戦争に関する企画は確実に減っている印象がある。「時期もの企画」と揶揄されることもあるが、せめて8月15日前後は戦争に関わる企画を出して欲しいというのが私の率直な思ひだ。しかし制作現場では、戦争に対する意識は確実に薄れている。戦争だけではない。調査報道など、取材に時間を費やす企画は歓迎されない空気があると、後輩たちの声も聞こえてくる。一方で、仕込みの要らない「アポなし企画」が増えているという。

日本は先の戦争で、310万人もの自国民が命を落とし、それ以上の外国人の命を奪った。戦争は決して消し去ることは出来ない、永

遠に語り継いでいくべきテーマだ。戦争の検証を国がやらないのならメディアが…という意識は、これからも繋いでいかなければならない。

来年は終戦から75年。オリンピックだけに浮かれることなく、テレビは戦争に向き合うことが出来るのだろうか。退職して半年、10月にはテレビに復帰する計画だ。「うるさい」と言われようと、「しつこい」と言われようと、戦争を伝えることの大切さを後輩たちに繋いでいきたいと思っている。

\*\*\*\*\*

## 京都のミニシアター

山田尚

京都のミニシアターが、2017年末から翌年にかけて相次いで閉館した。

「立誠シネマ」と「京都みなみ会館」。この2館は、成り立ちや立地が対照的だった。2013年に開場した立誠シネマは、繁華街・木屋町にある元立誠小学校。教室を黒幕で仕切り難段の座席、作品も多彩。革命直後を描いたキューバ映画で知らなかった世界を教わったのはこの教室だった。この建物の前に「日本の映画発祥の地」の碑がある。ルミエール映画を初めて実験上映した場所だという。京都みなみ会館は京都駅の南、東寺の近くに立地。華やかなイメージの京都とは異なる地味な場所。1950年代から、映画の盛衰に翻弄されながらも今まで永らえてきた。地域開発と建物の老朽化というそれぞれの理由があり、幸いにも当初から再開が模索されていた。

2018年7月、立誠シネマは、大文字山が見える出町柳の商店街に「出町座」として再出発した。1階を本屋とカフェにしたシアターは、庶民的な街に少し刺激を与えたか。そして、

京都みなみ会館は、今年8月末に元の場所現在工事中の斜め向かいで再開を果たした。比較的新しい建物だが、鉄製の外階段等が出口として設けられ、かつての雰囲気も一部甦る。昔の建物で佐古氏の「カメジロー」を見たが、

今回のオープン期間に、第2弾の「カメジロー」不屈の生涯がラインアップされている。「京都文化博物館」を付け加えておこう。ここはフィルムアーカイブも担い、保有する豊富な作品を中心に月毎にテーマを設け上映し

ている。かつて撮影所が集まり映画の都とも称されだけに、京都には映画への思いが消えないのである。

## 情報交換交流担当者から

### ～もっと話をしましょう！！～

テレビを含むメディアが劇的な変化を遂げています。

そんな中、身の回りに起きたことを語りあい、感じたことを共有しあい、刺激できる場がもっとあれば…と云う会員の声をよく耳にしました。

新しく発足しました“情報交換交流”の担当者としてはまず、全国各地の会員の声を広く拾わせて頂き、手探りで活動の方向を探ります(別掲)。

その上で、今後の展開と致しまして、会員同士の親交を深めるための“交流の場”を作り出していこうと考えております。

現在、手始めとして以下の交流会を計画したいと思っております。

### ○飲み会

3年ほど前に青山で行った「単なる飲み会」は、放送人同士のなかでも未知の出会いがあり楽しかったと好評でした。

会員相互の親睦と相互交流から、なにかが生まれる可能性も含み会員同士の良い刺激になることは確かです。

同様の“飲み会”を遠方の会員も参加しやすい日時に計画する予定です。

※参加ご希望の方は、事務局にご連絡下さい。追って詳細をお知らせ致します。

### ○小さな雑談会

テレビの事、メディアの事に限らず社会や世間のことまで、それぞれの関心ごとを気軽に喋る事で、感性を磨き、好奇心を活性化させる機会を設けたと思います。

2～3か月に一度位、平日の午後、少人数でお茶を飲みながらのフリートークを楽しむ場を作りたいと思います。

詳細に関してましては、改めてご連絡させていただきますが、興味・関心がございます方は担当者にご一報下さい。

# あおりの夏から、実りの秋へ

## 第19回日韓中テレビ制作者フォーラム 中国興義大会に向けて

日韓中フォーラム担当理事 渡辺純史

今年を象徴する言葉は「あおり」かもしれない。

「煽り」とは、ことを一方的な方向に追い込むように動かすことを謂うようだ。軽自動車に乗る老人婦女子が高級外車の屈強な男をあおる話は聞いたことがない。あおる側は常に強者であり、強者でありたい、見られたいと願う者である。

経済の更なる成長が止り、以来、この国は心身ともに豊かで成熟する国になろうとしていたはずなのに、国、正しくは政権いや官邸は、オリンピックを機に、日本という国の歴史を美しく飾り、強く見せ、他者より優位に立とうと焦り、慎みを失っているのではないか。

新年号「令和」の狂騒を煽りだした時から始まった今年の夏は、雑誌等で宣伝のための見出しを「あおり」ともいうように、元来「あおり体質」を持つメディアを巻き込み、国民に、道理ならぬ情動による同調を促し、異論、異端を排斥するように煽り始めたといえないか。行き着く先は、国民の嫌韓ムードの醸成、メディアは国民が知るべき日本の政情より、韓国政情、それもスキャンダルを面白おかしく取り上げる。日本が国民ばかりか隣国韓国を煽っているようだ。

こんな異常な夏の盛りりの8月23日、中国から突然飛び込んだメールによって、今度は、私自身が「あおられる身」となってしまったのである。

春に準備会議が開かれ、秋に本会議を行う

というのが通例のこのフォーラム、今年は準備会議が遅れ、夏に至るまで案内がなかったことから、年を越してからの開催と思いついていたところ、メールの内容は、2週間後の準備会議、2か月後の本会議、ヴェトナム国境に近い貴州省興義という、かつてない遠隔地での開催を知らせる、信じられぬものであった。開催地、開催時期の決定は開催国の専権事項とはいえ、作品選考、出品参加要請決定、資料送達、参加者募集等々の作業は、通例の1/4の時間で集中してやらなければならない。

「あおり」には、もう一つ、鎧を蹴って馬を進めるの意もある。大会実施に向けて歩を進めなければならない実行委員「馬」としては、主催者「乗り手の意のままに」あおられるのは、当然のこととはいえ、まさかの展開である。さて、準備会議である。9月6日から3日間の予定で開催地興義で行われる予定。到着するだけで、丸一日かかる行程、今度は本当のあおりにやられた。「台風」のあおりである。代表団の渡辺、深尾隆一さん、田中則広さんの3人は、行きは、上海をかすめ北上する台風13号のあおりで、上海到着が大幅に遅れ、当日の興義入りが可能となり、急遽浙江省寧波行きに切り替え、翌日昼に到着、ようやく会議の席に着けた。しかし、あおりはさらに続く。帰路も大変な目に合うことになる。今度は台風15号である。台風接近を受け、上海では、羽田便が欠航、翌日の成田便をようやく確保、急遽上海にホテルをとっての一泊となったのだ

が、その結果、翌日の成田の大混乱に巻き込まれることになった。結局、往復二つの台風に遭遇、そのあおりを喰って、3日の予定が5日間の出張となったのである。チケットを求め、上海空港内を息も絶え絶え走り回った老人達の滑稽な姿、深夜の誰も知らない寧波空港外をさまよひ、ホテルのネオンを見つけた時の安堵、次々に起った乗り継ぎの危機、その都度現れる「救いの神」の出現。今、思い返せば、笑ってしまうしかない、「あおられる」は「道中旅」であった。

ということで、本題のフォーラムの話である。日韓中テレビ制作者フォーラムは、ご承知のように、昨年の理事会決定により、今回のフォーラムを以て、放送人の会が主催団体から離れる。したがって今回のフォーラム中国興義大会は、団体として放送人の会が参加する最後の大会である。開催地、中国貴州省黔西南少数民族自治州 興義市は1000メートルを超えるカルスト台地に少数民族ブイ族、苗族が暮らす豊かな大地にある。準備会議で訪れた時は「実りの秋」の始まり、すでに刈り取りの終えた田圃には、日本でも馴染みの「俵ポッチ」が並び、コスモスの花が咲き乱れていた。

このフォーラムにかかわってきた日韓中の実行委員たちは、19年にわたり、東アジアの放送文化向上と三国放送人の理解促進、相互交流の種を蒔き続けてきた。今回、秋の実り真っ只中の興義の地で、フォーラム最後の収穫を目撃できるのか、注目されたい。

以下、その準備会議でやっと決まったフォーラムの内容を紹介し、会員諸氏の参加を招きます。(すでに別途案内済みですが、まだ、間に合います。問い合わせは事務局まで、締め切りは、9月26日。)

## 第19回「日韓中テレビ制作者フォーラム中国 興義大会」

場所 中国貴州省黔西南少数民族自治州 興義市

日時 10月29日(火) (入国)

30日(水)・31日(木)・

1日(金) 会議

11月 2日(土) (帰国)

作品テーマ

「多彩で多元的なアジア文明の多様性」

各国3本(ドラマ・エンターテインメント・ドキュメンタリー)

12作品が上映され、論議されます。

なお

これまで通り、旅費は自己負担、宿泊滞在費は中国が負担します。

○今回の開催地が遠隔ということもあり、旅費の3割を放送人の会で負担することを検討しています。

○また、渡航時間が長いこと、中国国内航空を利用しなければならないなど、格別の事情があり、チケットはできるだけ事務局にて一括購入する予定です。

○参加申し込みは、あまり時間がありませんが、9月26日までに事務局まで。

あらためて、皆さんの参加を期待します。

# 興義案内



夜の繁華街



メイン会場予定ホール



興義近傍 観光地「万峰林」



## 興義市概要

**Xingyi** シンイー  
 黔西南ブイ族ミャオ族自治  
 区  
**面積** : 2,911, 1 km<sup>2</sup>  
**人口** : 74,07 万人  
**空港** : 興義万峰林空港  
**鉄道** : 中国鉄路総公司・南昆  
 線、威紅線  
**高速道路** : 汕昆高速、晴興高  
 速、威板高速  
**Housoude** : G324

## 貴州省概要

**略称** : 貴・黔(けん) 省都 : 貴陽市  
**面積** : 約 17,61 万 km<sup>2</sup> (北海道の約 2 倍)  
**人口** : 3581 万人 (少数民族約 1390 万人)  
**主な民族** : 漢族、苗(ミャオ)族、布依(ブイ)族、  
 侗(トン)族、彝(イ)族、水(スイ)族、回族、  
 仡佬(コーラオ)族、壮(チワン)族、瑤(ヤオ)  
 族  
**特産品** : 茅台酒、玉屏箫笛(水竹の笛)、ろうけつ染  
 め、刺繍、銀細工 など  
**地域概要** : 中国の西南雲貴高原の東北部に位置し、  
 少数民族が全省人口の3分の1。カルスト地形で形  
 成された山、溪谷、滝、鍾乳洞が多い。  
**気候** : 亜熱帯高原気候、年間を通して安定し、冬に  
 厳寒なく、夏に猛暑なしと言われる。



# 消夏座談会

## 2019年夏の放送を語る

恒例の消夏座談会で今年度前半のテレビについて語ったのだが、やはり終戦特集に話題は集中した。今年は節目の年ではないが戦争特番は質量ともに例年以上である。戦争特番は座談会の記事のあと1表にまとめた。

座談会の直前、日韓中フォーラム中国大会が貴州省興義に決まり、出品作品の検討をこの場を借りて行った。今年度のテレビの情報の一環としてお読みいただきたい。

### A まず総論からいきましょう。

この半年はまず令和。戦後74年、昭和から平成、そして令和になって、異様な空騒ぎがあった。どうなるのかとみていると参院選はまことに低調。特に若者の投票率があまりにも低い。そしてSNSの影響が大きくなり、選挙のやり方が変わってきた。結果として、山本太郎の令和新選組とNHKをぶっつぶせという奇妙な団体が議席を得た。メディアの影響に地殻変動が起きていないかも知れない、そんな動きをどう受け止めればいいのか。

**B** 令和になったのを機に皇室報道、天皇関連の番組が増えている。戦中、戦後を通していろんな形で天皇が示されたが、なんとなくわからない。ただ皇室ブームを盛り上げているように感じた。

**C** 退位表明後、平成天皇、ご夫妻の人氣が出て、皇室ブームになっているのだが、女系天皇や皇室典範の変更などいざれ安倍内閣の大

きな政治問題になると思う。

**D** 天皇が侍従に語った胸の内、8月19日の慰霊祭で前の天皇の意志を継いで「反省」という言葉を入れたこと、など重い意味を持ってきている。昭和天皇が「反省」について忸怩たる思いであったのを、平成の天皇は引き継いだ、令和の天皇がどうするのか。

**A** これまで、天皇関連の情報は権力にとつて都合の悪いものは隠してきた。その形が二・二六の番組や侍従の日記などの番組で明らかになってきた。それは天皇ブームを作るものになるという危惧はあるが、昭和天皇の「反省」が平成天皇に受け継がれたこと、政府がおさえたこと、女系天皇の問題など、国民が天皇問題を考えるいいタイミングになったと思う。令和のバカ騒ぎはいい意味でのバカ騒ぎつまり天皇についての議論を国民もしてもいいのだという方向になってきている。

**B** 「拝謁記」(8月17日放送・Nスベ「昭和天皇は何を語ったのか：初公開・秘録・拝謁記」)では昭和天皇は戦争責任を感じていて退位をにおわせたと言えた。天皇がアメリカへ行ったとき質問に答えて「そんな文学的なことはわかりません」と言ったのが強く印象に残っているが、「拝謁記」はそれに手当てをしている感じで、いやな感じだった。

**C** 宮内庁の官僚の怖さ、凄さを最近とみに感じる。

**D** 「拝謁記」はNHKの塩田純さんがやったのだが、新聞社はテレビを後追いしているだけだ。もっといろんな真実が隠れていると思うのだが…

**A** NHKはこのところ皇室関係のトクダネが多い。退位のときもそうだ。いろんな努力、手段があったのだろう。昭和天皇は「反省」という言葉を田島長官に言っている。それを平成天皇、いまの上皇が受け継ぎ、さら

に今の令和の天皇が8月に言っている。

**B** 昭和天皇は戦争を始めて終わらせた天皇だからそれなりの思いがあったわけだが、それが皇室に受け継がれている。今年8月の天皇の「反省」の言葉にあつとおもったが、すると「拝謁記」が出てきた。田島長官は民間からの人だから相当率直に書いている。これまで富田朝彦長官が朝日新聞に書いたことがあるが、そんなに内容はなかった。

「拝謁記」は内容があつて考えさせられた。

**C** 昭和天皇は再軍備についても言っている。あれは戦争をやった天皇として言っている。

**D** 明治憲法下の天皇と平和憲法下の天皇が彼の中ではこつちやになつていく。すまないと気持ちで田島長官に繰り返す言。

**A** 現役意識で自分がやってきたことをフォローできるようなことを言つて田島氏にたしなめられている。

**B** 吉田茂は「反省」など退位につながることをストンプしたのだが、あれは岸信介はじめ戦争にコミットした人間を守ろうとしたのだ。天皇が退位した途端岸信介の復活はない。戦争に関係した官僚のほとんどは平和憲法下でそのまま居残っている。天皇が戦争責任を言う一番まずいのはかれら権力構造にある人たちだった、ともつとはつきり言つて欲しかった。隔靴搔痒の感じ「皆さん察してください」という感じの表現だった。

**C** 戦争が終わつて6年、東西冷戦、講和条約のなかで体制を守ろうとした吉田茂の立場、その時点での戦争指導者の立場は良し悪しは別として、あの番組で構図としてしっかりと描かれていた。それはわかつたと思う。

**D** 新憲法で「象徴」と決められているが、「象徴」とは何かなにも決められていない。そのため昭和天皇はいろんなことを言うのだ

が、その中で「反省」は確実に受け継がれている。あれが皇室制度の率直な現状だ。

**A** 平成天皇・皇后が新憲法下の民主的な天皇の在りようのオリジナルをつくつたと評価したい。

**B** 結果的にはそうだ。

**C** 昭和天皇は政治的なことを言おうとしては田島長官にたしなめられている。しかし、戦前からの内奏、総理大臣や国務大臣が天皇に国政の報告をする制度はいまも続いており、あの場には天皇と大臣以外誰も入れない。昭和天皇は昔のままの形で内奏をうけたが、平成、令和と内奏の形は変わつてきているようだ。

**D** あの番組ではドキュメンタリーの部分とドラマの部分があり、ドラマでの天皇は実直で小心翼翼、あつちに振れこつちに振れて考えている。あんな姿を平気で出す時代になつたのだし、そのことをだれも非難しない。秋篠宮の周辺についてもかなり平気で言っている。これはいいことで、この番組のドラマもそんな空気を作つたようだ。

**A** 宮内庁も安倍政権もあの「拝謁記」に何の反応もない。役人として余程用意してかからないと危ない、内閣としてはここで火がついては困る、と思うだろう。不気味だ。

**B** 女系天皇、象徴性をどうする、など、みんな曖昧模稜としている。

**C** 意図的なものがあつてこの情報が出てきたのだろうか？

**D** あの歴史的な文書を田島道治の遺族がNHKに寄贈したことの意味を考えたい。大学、国会図書館など公的なところへ寄贈されたら公的な歴史資料になる。NHKは公共放送とはいってもメディアだ。何故新聞社ではなかつたのか。新聞社はそれぞれ難しい。朝日もサンケイも読売も毎日も問題がある。民

放はどうか。日テレもテレ朝もTBSもないだろう。すると引き算でNHKかなということになる。

**A** NHKはたしかにアメリカやロシアのアーカイブス、国立公文書館の膨大な資料を人海戦術で読み込んできたノウハウがある。この新聞社もこんなヒト・モノ・カネのかかる作業はできない。この分野はNHKの独壇場で、びつくりするような発見もこれまでであった。そうしたNHKの力を認めるのに吝かではないが、今回NHKは放送が終わって2日後にメディアの取材に答えた。しかし一部しか公開していない。使った部分だけ公開し、残りは公開しない。遺族や関係者のプライバシーに触れるところがあるので、というのが非公開の理由だ。一方、放送ではニュースなどでスクープ扱い、小出しに出していた。新聞の報道はNHKの放送以上のものはない。三皇は『反省』という言葉に拘ったけど吉田首相の反対で入れなかったというのが眼目だ。

公開されなかった部分はNHKの人にしか見られない。初代宮内庁長官の日記という極めて公的な重要な歴史資料の扱いがそれではないのだろうか。

**B** ただ、あれは私的な日記で公的な記録ではない。番組の中で言っているが、長官はもう危ない入院するとき焼却しようとした。孫の証言では大叔父にあたる人が「悪いようにはしないから任せなさい」と引き取った。

**C** 本戸日記も私的な記録だろう。

**D** 本戸日記の入江侍従の日記も本人が了解して公開されている。入江侍従は公開されることを予定して書いている。

**A** 令和で一騒ぎのあと出てきたのが解せない。昭和天皇はあれだけ苦悩したのだから責任問題はもついいだろう、というムードにな

りそうだ。

**B** 天皇は「開戦の詔書に自分は署名したのだ。天皇の命令で開戦した事実は変えられない」といい、田島長官も同じことを言外に言っている。

**C** 天皇が小心で誠実に受け止めていることは確かだ。

**A** 総論がいつのまにか一つの番組の議論に集中してしまったので、総論に一度もどりましょう。

**B** 最初に選挙の話で出たが、SNSという理屈よりも感情的、情緒的な、スピードの速い反応に、見世物にしなければ伝わらないと、次々に新しいネタを並べ、重要なものが隠れてしまった。選挙をはじめ政治課題、国際問題、日韓の問題も「またこんな問題が起こった」とつきつぎに取り上げて面白おかしく伝えている。

**C** STBSの「報道1930」、松原氏の番組を欠かさずみているが、初期はネタや議論に自主性があった。最近では圧力がかかったのではないかと思える。

**D** 終戦特集は民放にほとんど単発枠の作品がない。NHKは頑張っている。

**A** いや、NHKは来年オリンピックで終戦特集ができない。前倒して今年頑張っているんじゃないか。

**B** アニメの大作、映画「ヒロシマ」、旧作の再放送とどんどん並べて放送したNHKの編成は他を圧していた。評価していい。

**C** 毎年繰り返しかもしれないが、戦争について一般庶民の発言は記録しておくべきだ。

**D** いまネタ元にSNSが多い。あおり連転もそう。一方的に炎上させてしまう。テレビも面白くなくちやと病的になっているようだ。

**A** テレビが先に集中してそれをSNSが真似る時代もあったが、それは薄れてきたのかもしれない。いまやインターネットと結びつかないとも動かない、通信と放送の滅茶苦茶な融合が起きている。放送も正念場ではないか。

**B** 令和と元号が決まるには安倍首相の意向があったとされるが、発表の前にリークがあったようで、発表直後の元号の解説があまりに準備が整っていて奇異に感じた。

**C** 平成から令和へは二重構造になっていて、平成天皇は生きているうちに退位して上皇になった。昭和天皇は昭和25年、世論もあつて退位のタイミングがあった。それを止めたのは、戦前と戦後で日本の権力構造がほとんど変わっていないということだ。その構造を守る事が綿々と続いている。二・二六事件を海軍が1週間前に計画を知っていた

(8月15日放送、NSペ「全貌 二・二六事件」**最高機密文書で迫る**) というのもそう。事件以後、政治がどんどん後退していき。

**D** 「日本新聞」(8月12日・NSペ)「かく**自由は死せりある新聞と戦争への道**」もスクープだろう。小川平吉の孫が保管していた約3000日分全部を閲覧できてあの番組ができた。

**A** 浜口雄幸を射殺した佐郷谷留雄が小川平吉の作った「日本主義」を唱える団体の一員。いまの日本会議とは違う団体派右翼。小川平吉は北一輝などと一緒に新聞を作った。陸羯南が主筆の「日本」が1914年に廃刊になっていたので1925年「日本新聞」として復刊した。再創刊とも言っているが似て非なるプロパガンダ紙だ。

**B** たった7年で日本の世論は急変し、小川平吉はこの新聞は日本の新しい道を作ったからと休刊にする。あれには仰天した。

**C** これまで終戦特集は戦後何年という意識で作っていたが、今年には新しい戦前になったという意識があるのではないか?

**D** 少し買いかぶりだろう。(笑い) 番組組を見ると証言する人の年齢が高い。最後の遺言として、これまで黙っていたことを話して死んで行きたいという人が多い。「取材の後2カ月で亡くなった」といったテロップもあった。取材する側に「今年でもう最後だ」という意識があつたからではないか。

**A** それはこの数年みんなそう。しかし、リアリティーは別として、取材者も証言者も日本が戦前の道を通りつつあるという怖れはあると思う。

**B** 全体としてヒロシマを扱ったものは多かつたが戦争そのものを扱ったものは少ない。ヒロシマに分かり易く番組が集まっている。リニューアルした原爆資料館の新しい展示から原爆を辿る「**ヒロシマの声が聞こえます**」**かき生まれ変わった原爆資料館**」(8月6日放送・NSペ)。そして映画「**ヒロシマ**」。

**C** 映画「ヒロシマ」(メルリン国際映画祭長編映画賞受賞) は昭和28年、日本教職員組合の制作。監督・関川英雄。出演・岡田英次、月丘夢路、山田五十鈴、市民8万8千人。一人50円のカンパ・日教組50万人の支援で生まれた。8月16日、深夜0時からEテレで放送された。NHKの編成を褒めたいのは、8月10日、E・T・V特集の「**忘れられたヒロシマ**」**あの日を8万8千人が演じた**」。これであらかじめ解説をして、そのあと映画を放送した。新聞に見た人の反響が凄

**D** 編成を褒めるなら地上波のいい時間帯で放送してからにしよう。

**A** 相田さんの「50年目の乗船名簿」も総台

のいい時間でやらなくちゃね。

**B** この映画「ヒロシマ」は反米的だと松竹が配給を拒否、つまりつぶされたのだが、そんな映画を放送したことで褒めよう。

**C** だから編成はもうひと頑張りしなければ。(笑) それにしても8万8千人のエキストラは凄い。あれをどうやって動かしたのか、助監督の力は凄い。

**D** 今年、1950年頃の講和条約、東西冷戦を背景にしたものが多い。「拝謁記」の天皇の逡巡もその一つだが、BS1スペシャル「**隠された戦争協力〜日本人と朝鮮戦争〜**」

(8月18日放送)もそうだ。アメリカ公文書館で「米軍による日本人70人の尋問記録」がオーストラリアのテッサ教授に発見され、それをもとに取材した。参加した日本人がどんな経緯で戦闘に参加し、敵の朝鮮兵、中国兵を殺して生き延びたかを米軍が克明に尋問。失業をおそれやむを得ず参加した人の生存者を訪ねる。テグの近くカサンの激闘の生き残り・マクレーン大尉の証言。日本人ヒーロー・ジョン・ヒダノは直撃弾で死亡。700人のうち生き残りは6人。歴史は封印される。労作だ。

**A** 最近、昔ならNSペでやったものをETV特集でやっている。NSペとETV特集の乖離が気になる。

**B** NHKはBS1スペシャルのドキュメンタリー枠がある。50分2本で100分で作られるが、100分の時間をもてあましているものがある。構成力が弱く、前後編に別れたことで羅列になりがちだ。

**C** 今年の日本記者クラブ特別賞を樺プロの金本麻里子さんが受賞した。「隠された日本兵のトラウマ〜陸軍病院8002人の『病床日誌』」への賞だが、この番組は昨年11月BS1で放送された。

**D** 6月8日には「**ポルトとタシヤ〜マンホールチルドレン20年の軌跡**」が放送されている。ウランバートルでマンホールに暮らしていた少年を追いかけている。作品としてはいいのだが、100分は見つらい。

**B** 8月4日のBS1では「**マンゴの樹の下**」は100分、8月8日の総合放送では70分だ。時間の問題を言うと総合で100分はきびしいとなるのだが、BSでは100分という時間のゆるさがるまく出た。70分ではエッセンスが失われた気がした。

**C** 4日のBSがドキュメンタリーで8日はドラマ。8日のドラマは73分だが、21日のBSプレミアム、24日のBS4Kでは89分。やはり長い方がいい。

**D** ドラマの脚本を書いたのは長田育恵。てがみ座の主宰で戯曲は多く書いているがテレビドラマの作家としては力不足だ。そして美術セットが弱い。

**A** 戦争シーンの実写は難しい。逃亡して行くところはしんどい。岸恵子と清原果耶、渡辺美佐子と山口まゆのリレーで戦火のルソン島と戦後の写真館をつなぐ物語なのだが、ドラマとして成立し難いのか…

**B** 制作がテレパックでNHKの制作の財産が使えない。メインセットの写真館はペラペラだ。

**C** 最近、一人の女優をいろんな番組に使うのが気になる。例えば、清原果耶はBSで時代劇「**虫草**」、朝ドラで主人公の妹、再放送を含めると4つ出ている。BS1スペシャル「**アニメ大好きなあなたへ**」のナビゲーターもやっている。

**D** 瀬戸康史もそうだ、「まんぷく」で長谷川博巳の部下をやり、「ルパンの娘」「デジタルタトゥー」などいろんな番組に出ている。

**A** NHKで企画を通すときかつてはキヤス

ティングを聞かれることはなかった。今は必ず聞かれる。知ったかぶりの編成に知られた名前を言ったり企画は通る。

**B** 天皇ものでは「**アナザーストーリー「天皇のちのちの旅**」前後編がある。前編は1月15日放送「**平和への祈り**」、後編は4月23日放送「**象徴への模索**、制作は「えふぶんの1」という制作会社。「ポルトとタシヤ」を作った会社だ。

**C** 平成天皇をきちんと描いて、単なる天皇協賛番組ではない。極秘とされた水保訪問もある。平成天皇と美智子さんはあちこち動いているがきちんと目的をもってやっている印象だった。前編は若いころ、後編が最近と時系列的に分けてある。

**D** 終戦特集は今年節目の年と同じくらい本数が多かった。オーソドックスなドキュメンタリー形式でない映画「**この世界の片隅で**」の皆さんのコンセプトを使って隣にいる、どこにでもいる皆さんの一般視聴者から募集した。いろいろ工夫した番組だ。何故こんなにNHKは頑張れたのだろうか?

**A** 放送人グランプリで終戦特集4本をまとめて表彰した、あの成功体験は大きい。終戦特集を何本かまとめてグロスで勝負するのが編成的には効果があると判断した。NSペのチームもそう判断している。

**B** 番組の質もよくなっている。それは榎井会長が変わったことの影響があったと思う。NHKをずっとウォッチしていると現場の頑張りだけでは納得できないところがある。

**C** 今の体制も決してリベラルではない。**D** ヒロシマは多く出てきたが、戦争そのものを扱ったものはどうだろうか?

**A** 戦争そのものという「**ガダルカナルの指揮官**」くらいで、あとは朝鮮戦争など、

日本では戦争はおわったが世界では戦争が続いてそこに題材があったり、スポーツと戦争というものもあった。その意味では多種にわたっている。周年事業として柱を立ててきちんとやったのでなく、再放送や映画アニメを含め鼻的にきちんとやろうとした編成の努力が買える。

**B** 来年オリンピックは8月9日が閉会式、終わると25日からパラリンピック、終戦特集はやれそうにない。だからやれるものは今年にやった。

**C** 児童劇団の来年のスケジュールはスタジオオ、リハーサル室、会議室など全部オリンピックにおさえられていて練習場がない。それ程オリンピック番組が作られるということだ。

**D** 池上彰の「**戦争を考える**」は今年11回目。「**加賀**」を空母に改造しミッドウエーで撃沈されたなどわかりやすい話だった。

**A** 「**フェイクニュース**」で戦争に駆り出された」と池上は言ったが、言葉を考えて欲しい。フェイクニュースといった単純なものではないだろう。

**B** この番組の企画監修広瀬哲雄さんはNHKの人だ。

**C** テレビ朝日は毎年「**ザ・スcoop**」スペシャルで終戦特集企画をやってきた。昨年は真珠湾攻撃をめぐる日米のスパイ戦争だった。今年はない。

**D** 「**報道ステーション**」の最後のコーナーでやっていたが、「**テレメンタリー**」は8月24日の早朝4時半から「**中実を刻む〜語り継ぐ戦争と性暴力**」をやっている。松原文枝がD。

**A** TBSは「**子供たちの戦争**」をやった。8月11日放送。関口宏が中学生に問いかける。「**ニュース23**」の中で綾瀬はるかを使っ

て満蒙開拓団をやったり、レギュラー番組の中で頑張っている。

**B** 「報道特集」では戦災孤児をやっていた。

**C** 深夜、早朝の枠がある。NNNは深夜0時55分から。TBSのJNNドキュメントは深夜1時20分から。テレ朝は早朝4時半から。朝4時半からはなかなか見られない。

**D** Eテレで三鷹事件をやっていた。(E-TV特集「三鷹事件 70年後の問い」死刑囚・竹内景助と裁判) 塩田純の制作だが評価が難しい。

**B** 三鷹事件をいまの若い人はほとんど知らない。占領政策が変わってレッドパージがあった時代。先ほど言った天皇の「反省」を吉田茂がおさえこんだ「逆コース」の時代だ。

**C** あの番組では次男の健一郎が顔出し不可で取材に応じて、肺がんで声もかすれ、口元ショットで鬱陶しかったのだが、最後に顔を出した。父親の竹内は脳腫瘍で獄死し、それを継承した訴訟を息子が起こしたが棄却された。取材の最後で息子が突然顔を出されて、制作者の構成が破綻したのかもしれない。

**D** 塩田氏には下山、三鷹、松川のあの不可解な事件の関連をやって欲しい。松本清張以来CIAがやったというのが定説だが、アメリカの国立公文書館にこの資料は出てこないのだろうか？

**A** 下山事件は占領軍と国鉄労組がからんでいて、真相究明は大変だ。

**B** BSフジで「落語家たちの戦争」(8月12日放送)をやっている。戦時中落語家たちが自主規制で禁演落語を決め、国策落語を作った経緯を林家三平が追い、母親の蛭名加葉子が証言する。三平は「決して面白くありません」と何度も繰り返して国策落語を演じるが三平に芸の円熟がみられた。

**C** 「インパール」の再放送をやっていた。歴史に残る名作は再放送やちよつとした手直しで放送してもいいと思う。

**D** 水爆の開発の再放送もあった。何度やってもいいテーマはある。戦艦大和、武蔵をやったし、信濃もやった。

**A** 信濃は戦場へ行く間もなく潜水艦に撃沈された。あつけない最期だ。

**B** 若い人は8月のNHKは鬱陶しいと見ないのだからアニメとかいろんな工夫をする必要がある。その成功例が出てきている。

**C** 「100分で名著」で「戦争論」をやった。8月5日〜全4回、放送のタイミングが良くてつくづく考えた。テキストはロジエ・カイヨワの「戦争論」で冷戦時代、国家と戦争を人類学の目で考えたのだが、いまやテロの時代。テロは国家ではないので、終戦も講和もない。殺し合ってゼロになるかどうか。そんな戦争になってきて、そんなテロを防ぐため監視社会になっている。国が国民を敵視するシステムになってきている。

一方、最近のニュースではアメリカが宇宙軍を作った。地球上の全面戦争論は成り立たなくなっている。

**D** 「ガダルカナル」(8月11日放送・Nスペ)はラテ欄に「新発見資料と秘蔵映像」とあったが。

**A** 米軍の飛行場占拠作戦のフィルム10時間分が見つかつたそうだが、特に新しい資料とは感じなかった。これまで海軍は陸軍と比べてどちらかというと清々しい、立派な軍隊のイメージがあつたが実は陸軍同様ひどい。救援要請を無視して別のところへ展開し、見殺しにして全滅させた。

**B** むしろ、囮に使つた。兵を捨て駒としてどんでん死に追いやったのは、特攻を含め、元凶は海軍だ。

**C** 捨て石として永久抗戦を命じ、本土決戦を遅らせようとした。同じことが沖縄でも行われている。

**D** 二・二六では海軍は陸軍の動きを見ていて、最悪の場合は東京湾から艦砲射撃する構えだった。この海軍もひどい。

**A** 終戦特集をいくつか見てみると、いまの「海軍は実は悪かった」ようなくつつかの文脈が出てくる。これは終戦特集の量が意味をなしてきたのだと思う。

**B** 日本の軍司令部、参謀本部がおかしかったのは陸軍と海軍の仲が悪く、お互いに情報を隠し合つたことにある。二・二六で海軍は青年将校の動きを刻々知つていながら結局記録を隠しており、天皇の強硬な姿勢をバックアップすることで天皇の権威を守つた。

**C** 東京裁判でも海軍は組織力でかばい合つて絞首刑を一人もだしてない。嶋田繁太郎はA級戦犯だが終身刑だ。

**D** 「インパール」の最後に司令部の内情を知る元将校が「軍隊はひど過ぎる。兵士を虫けらのように殺した」と泣く。あそこに集約されるが、今になって記録は出てくるが軍の問題は曖昧なまま。日本の体質の基本的な弱点を論理的に分析していない。日本の被害が明らかな原爆だけ残つた。戦争の仕方、軍隊の分析はされなかった。東日本大震災のときは失敗学の大家が失敗からみたチェック点を出した。あのようなことが戦争の反省ではできていない。

**A** ここ数年は、軍の無責任体質、兵を虫けらのように扱い、人命を軽視したことがいかに国民を不幸にしたかをやっている。

**B** 軍司令部などの軍を動かしてきた官僚群がある。官僚群は全部生き残つて戦後処理もやった。その中から多くの政治家が出てきた。戦前からの体質は官僚によって引き継が

れている。

**C** 軍人恩給は階級による差が大きい。上級将校に厚く、下つ端の兵には雀の涙だ。昔の偉い軍人がテレビに出てくると立派な家に住み、立派な服装だ。下つ端の兵の羨望と怨念は残り続ける。

**D** シベリア抑留者の遺骨が間違つていた話がある一方、引き取り手がなく厚生省の倉庫に遺骨は増え続けている。

**A** テニヤン島に何度も足を運び小さな骨をみつめる映像があつたNスペ「戦没者は二度死ぬ」遺骨と戦争(8月6日放送)だ。厚生労働省は2024年までを遺骨収集の集中期間としているが、課題が多く進んでいない。DNA鑑定も行われていない。国策で移住した人々は報われていない。

**B** 昨日のニュースでDNA鑑定に3億円予算がついたと報じていた。

**C** 「全貌 二・二六事件」ではNHKは80年ぶりの貴重な資料を入手したのだが、かつてNHKは二・二六の歴史的な二つのスクープをしている。一つは「戒厳司令 交信を傍受せよ」で、二・二六の青年将校と外部の電話との交信を盗聴した録音盤20枚がNHKから出てきた。もう一つは「二・二六事件消された真実」で1988年放送。二・二六事件軍法会議の主席検察官匂坂春平が膨大な調査資料を自宅に持ち帰っていたのを遺族が柳行李に入れて保管していた。Nスペの中田整一さんはその存在を知つて7、8年こいで交渉してやっと公開にこぎつけ、番組になつた。この流れで今回の資料入手なのだ。クレジットをみると資料提供に中田さんの名前がある。今回のスタッフは中田さんにいろいろ話を聞いて番組を作つたに違いない。更にDのトップに右田千代さんの名前がある。彼女は戸高一成さんの資料で海軍の「疚しき沈

黙を作った。

「全貌 二・二六事件」という番組ができたのは決して偶然ではない。Nスベには「ブツを探せ」という合言葉がある。とにかく資料を探せということだが、これは先輩から綿々と伝えられた伝統だ。今回タイトルに「全貌」とあるのは録音盤、匂坂資料、そして今回と先達から引き継いでの「全貌」である。

D ということはNHKにはまだこれに匹敵する埋蔵ネタがある？

A いや、続けているとネタ元からやってくる。証言者は亡くなったか高齢だが、眠っている資料が出てくる可能性はある。証言者が亡くなったから出てくるということもある。遺族が聞いていた話を語ることもある。その資料を読み解く力は伝承されていて初めて生まれる。

B 今年、広島原爆資料館がリニューアルしたが、そこにあるのは「ブツ」、「もの」だ。「もの」は語るのだが、それを聞き取る人が必要だ。

C 「インパール」のときは牟田口中将の遺族に取材し、今年の「日本新聞」では小川平吉の遺族にちゃんと取材している。流石と言わべきだ。

D 今回の二・二六には100歳を超える証言者が出てくる。当時は20歳前後の若者だったはずだ。あの人たちの証言を聞いていると参謀本部の生き残りは絶対に資料を残していると思う。

A 戦後、霞が関の上空は資料を燃す煙で黒くなった。原則として資料は残されなかった。資料を焼いた役人は歴史に対する犯罪者だ。

B 中田整一さんは「トレイシー日本兵捕虜秘密尋問所」で講談社ノンフィクション賞を

受賞しているが、この本によると、日本兵は一兵卒までみんなが丹念に日記を書いている、待遇がよかったので尋問に対してべらべら喋ったとある。その情報が日本本土空襲の役にたった。

中田さんは昭和史、戦争史のプロだ。

C ETV特集「少女たちがみつめた長崎」をみた。放送人グランプリの終戦特集の表彰で戦争体験者としての感想を述べたことがあったが、その世代があと10年でいなくなる、とこの番組をみて痛感した。

D Dは福岡放送局の渡辺孝。林京子の作品の紹介。長崎西高へはさあつと取材したという感じだ。作家の平野啓一郎が出てきて、林京子を語るのだが、少女たちは添え物だ。だったら林京子を今の子たちにわかるように作ればいい。

A 林京子の本を探したがみつからない。林京子は一昨年亡くなってから国際的に評価が高まっているそうだが、文壇では「原爆を特権化している」と不評だった。

B 被爆体験を若い世代に伝えることが眼目だったと思うが若い人が借りてきた猫みたいでインタビューがとれていない。

C 長崎のものは「焼き場」立つ少年をさがして」。NHK総合で8月9日午前2時13分からという深夜に放送した。ローカル番組のいいものを放送する株だ。「もついちど」長崎の原爆を見つめる」は長崎放送局がシリーズで作っているもので、ここの作品が焼き場に立つ少年だ。

D ジョー・オダネルのこの写真は前にいろんな形で取り上げられたが、最近、裏焼きだつたとわかり、カラー化して少年に放射能障害が出ているとわかった。少年に会ったという人も探しました。思いがきちんと伝わるいい番組だ。

A 今年には沖繩のものが少ないがNHKBBSで、につぼんぐるり『きんぐるり沖繩金曜クルーズ』『沖繩戦74年 びめゆりの想い』令和へ』があった。ひめゆり平和記念館を全度リニューアルする。「ピンとこない」という子どもたちに対してリニューアルをどうすればいいかという番組だ。

B 意外に面白かったのが東京オリンピックがでなかった話。8月18日、Nスベ「戦争と幻のオリンピック」アスリート知られざる闘い」。水泳選手松沢一鶴の物語

C 折角あれをやったなら、日本初のテレビドラマ「夕餉前」をとりあげて欲しかった。あの時期、1940年、NHKの技研から内幸町の放送会館、愛宕山と日本橋三越に生で送られて一般公開された。

D オリンピックのテレビ中継が計画され実験放送が続けられたが、オリンピックは中止、その枠でドラマは放送された。演出に坂本朝一（のちのNHK会長）の名がある。

A 「いだてん」でそのへんをやるだろう。いま東京オリンピック招致の段階で中止はあと2、3回あとになる。

B 「いだてん」の視聴率はいま5%まで落ちた。きびしい。主人公の金栗四三に吸引力が弱いと思ったが、田畑政治になってうるさくだけ弱い。大河ドラマはやはり主人公で引く張って行くものだ。お金もかかって、役者はそれぞれにいい芝居をしているのに残念だ。

C 落語の部分は全体の流れから分裂していただければいい。宮藤官九郎を起用したのはそこに面白さを期待したのだろう。「東京オリンピックの史実ではなくドラマとしてのオリジナリティーを込める作りにした。これは大河ドラマで特に目新しいものではない。かつて

「八代將軍吉宗」で江守徹が江戸のニュースキャスターと称して近松門左衛門に扮し「その時吉宗は！パンカパン！」とやった。その形が少し複雑になっている。

D 大河ドラマには大きい文法があつて、主人公が通っていないと見る側は気力が持たない。すぐチャンネルを回し「ボツンと一軒家」を見る。

A いまNHKには戦略がない。かつて時代劇をやめて近・現代へ行くときは戦略があつた。5年で近・現代を考えるが、前倒しをして3年で時代劇に戻るとか、3年、5年のスパンの戦略があつた。いまは行きあたりばつたりだ。次は黒崎、香椎のコンビでやるそうだが、間もなく発表になるそうだが、担当に命じられて「どうしよう」と困っている。つまり長期戦略に基づく局の方針はない。

B かつては大きな方向を決める会議が必ず開かれていたが、いまは聞かない。

C かつてはドラマ部単位で企画を進められたが、いまは総局長、会長の決定が要る。しかし大河の低視聴率はそれが原因ではない。いま大河の魅力は何かが見失われている。歴史上の人物、みんなが知っている人の生涯を描く、その川の流れを描く、それが忘れられている。

D 主人公は歴史上有名でなくてもいい。繰り言になるが、今回は加納治五郎を主人公にすればよかった。そうすればあの話は変わった。

A 今も加納治五郎はドラマの中で立っている。

B 加納治五郎は間もなく死ぬのだが、彼の志を継いだ姿三四郎が出てきて東京オリンピックにつながる。東京オリンピックでは神永がヘーシンクに敗れるがそのため柔道は世界の柔道になった。そんな流れのある物語が描

ける。

**C** 講道館の加納治五郎としてなんとなく古臭い人物と思っていたが、実に開明的で国際的な人物で、柔道以外の多くの近代スポーツに関わっていたとは知らなかった。「いだってん」では金栗よりはるかに出番が多い。

**B** 外部プロの作り方の悪い面が出ているようにだし、訓覇圭、宮藤官九郎の「あまちゃん」の成功体験が邪魔しているようだ。「あまちゃん」では玩具箱をひっくり返したような作りが魅力だったが「いだってん」ではやりすぎだ。

**C** それぞれの回をきちんと見ると悪くはない。人見絹江の回は素晴らしかった。毎回苦労して作っていてセットも素晴らし。

**D** しかし視聴率5%では終息論が出ざるを得ない。費用対効果もあるし、何しろ大河だから。

**A** 民放なら既に打ち切りになっている。何とか手当てができないものか。このままでは野垂れ死にで、大河そのものの終息論も出る。

**B** むしろ終息論が出て、長期戦略の議論などがなされることに期待しよう。

**C** 終戦特集については別表にまとめてあるが、この中でイチオシは何だろう。

**D** BS1スペシャル「隠された戦争協力〜日本人と朝鮮戦争〜」。これはショックだった。テグの近くにカサンという激戦区があったと知り、韓国へ行く機会があったら現地を見てこようと思う。

テグの北側で山が迫っているところがカサンで、やって来た弟が「兄はここで死んだに違いない」と言うと霧がさーと広がって確信する。短いカットでもいい取材が出来ていると思った。ただ戦闘シーンは要らない。

**A** この番組はテッサ教授の持ち込み企画で

局制作だ。当時のアメリカ軍は日本人を兵士として使うことはソ連、中国を刺激するとして極秘扱い。犯罪者扱いで尋問し、記録は外に出さないことになっていた。

**B** NHKBSの「WAR B R I D E 戦争花嫁たちのアメリカ」はDがテムジンの小柳ちひろ。彼女は戦争ものを作る女性Dとして金森麻里子と双璧だ。この二人は凄。

**C** 小柳ちひろさんは放送人グランプリで表彰したことがある。

**D** この番組では小柳さんの人柄で取材にに応じていることがはつきりわかる。インタビューが実に丁寧だ。多様性と慣用性のアメリカを生きた戦争花嫁たちに「トランプ大統領になったアメリカはどうですか？」というところまで番組にしている。

**A** AIの時代と言われるが、AIを扱った番組はもつとあつていい。6月11日放送BS1「フランク・シニャーの誘惑〜強制終了人工知能を予言した男〜」は英国の天才科学者アラン・チューリングをとりあげていたが、AIの本があれだけ売れているのにテレビ番組は実に少ない。

**B** 海外のドキュメンタリーの枠で放送していた。

**C** 最近の若者が見るドラマを知りたい人に「ルパンの娘」を薦めたい。映画「翔んで埼玉」を作ったスタッフで、泥棒一家の娘深田恭子、その祖母のどんぐり、警察一家の長男瀬戸康史、ミュージカルの大貫勇輔、キャスティングのぶつかり合いでドラマが始まり大貫が突然ミュージカルを始めたり、飛んでる新しい形のドラマだ。

「ここから、日韓中フオーラム中国大会への出品作品についての検討である。今回のテーマは「文化の多様性」――

**A** 日本の芸能の紹介というのはどうだろう。NHK Eテレ「にっぽんの芸能」(毎週金曜・司会石田ひかり&吉田真人アナ)の8月30日放送で、人間国宝・長唄三味線の全藤政太郎(83)を特集していた彼の処女作「六斎念仏意想奏曲」を歌舞伎の松本幸四郎も参加して演奏している。

**B** 熊本の村上雅通さんの話では、昨年、民放連の西日本の部で評価の高かった、「にっぽん」で「平成最後の宝船」K T Nテレビ長崎制作が良いと思う。太鼓山・コッゴデシヨは長崎くんちの出し物の中で最も人気が高く、勇壮だ。1トンを超える太鼓山を放り投げ片手で受け止める。大勢の力持ちの若者が必要で、樺島町だけでは足りず募集してオーディションで選ぶ。選ばれた若者たちは小屋入りと呼ぶ稽古始めから子供や大人たちと一緒に稽古に参加して夢中になって芸を仕上げに行く。長崎はアジア文化の通り道で龍踊がある。今回日韓中フオーラムの会場になった貴州省の興義は、中国がああ地を観光開発する意図で選んだ。

**C** 東北にも祭りを扱ったものがある

**D** 8月17日放送・NHKBSのドラマドキュメンタリー「京都人の密かな愉しみ 品修行中 祇園さんの来はる夏」は、祭りと祭りを支える若者たちを丁寧に描いていた。演出・脚本はオッティモの源孝志。長尺で2時間なのが玉に瑕だ。

**A** 前に「日本風土記」をやっている伊藤純さんに番組を選んでもらったことがあるが、韓国、中国にも評判がよかった。またお願いしたら東海道品川宿の神輿がいま盛り上がりしているが、伊藤純さんは関わっている。

**B** 8月23日・NHKBS放送の「新日本風土記 東海道・品川宿」だ。D・米本直樹、P・矢島良彰。「新日本紀行」には面白いものが多い。

**C** 南海放送制作・NNNドキュメント「四一冊の春くめさんが伝え続けること」がある。4月7日放送。松山市の小倉うめさん(72)は季刊誌「秘めたるま」の出版を35年間続けて141冊になった。うめさんは生まれつき脊骨に障害がある。女性障害者の秘めた思いを綴って、苦しんでいる人々を励ましている。

**D** ドラマではH T V制作の「チャンネルはそのまま！」(55分・全5回)でどうだろう。原作がマンガで佐々木倫子、脚本が森ハヤシ、主演は芳根京子、他に大泉洋、根岸季衣、泉谷しげる、など。「ミエルヒ」の藤村忠寿が作った。

**A** 総監督本木克英。東京はMX1で8月に放送。ローカルテレビ局に謎の『バカ枠』で採用された新人記者(芳根)に振り回されるテレビマンたちを描く痛快コメディ。

情報番組と報道番組はどう違うかとか基本的なことを若い人が議論し、そこに営業が入ってくる。基本的なことを面白可笑しく見せている。社運をかけてドラマを作っているとも見える。

**B** NHKBSの「蛭草」は清原果耶がいいが男性が弱い。葉室麟の原作はドラマ化が難しい。

**C** あれば若者向きに作られているのだろうか？

**D** いや、時代劇は全部年寄り向きだ。あの放送時間も年寄りの時間だ。若向きは例えば「おしん」。いまNHKで再放送しているが若者に見られている。入口は年寄り向きでもちゃんとした作品なら若者は見てくれると思う。

**A** ショーケンの「優たけの天使」がいま若者に人気だ。

**B** WOWOWの「そして生きる」は岡田恵和のオリジナル脚本。震災をからめた話

だ。  
**C** 同じ書き手なのに「セimoto」はどっしてあんなに違うのだろう。志が違うのだね。  
**D** WOWは岡野真紀子がP。幼くして親を亡くした有村架純と災害ボランティアの坂上健太郎の恋が実るかどうか、うまく作りこんだラブストーリーだ。  
**A** 日テレの「偽装不倫」はマンガが原作だがテレビのカット割りがマンガそのまま。黒木華主演の「風のお暇」はコナリミサトのマンガが原作だが、マンガに対抗する気構えで作っている。演出家の矜持を感じる。  
**B** 韓国ドラマはよく出来ているのが多いが、その焼き直しが作られている。  
**C** エンタメでは「ぼつんと軒家」だろう。でも貴州省のあんな遠いところへ番組担当が行ってこないだろう。  
**D** ドキュメンタリーではテーマに沿わないかもしれないが、相田洋さんの「移住50年目の乗船名簿」。中・韓には50年継続のドキュメンタリーは皆無だろう。Eテレで4回放送したあと、地上波で1時間バージョンを放送した。盛岡の伊藤さん一族の物語にしぼった。  
**A** あれは成功物語で面白くみられる。  
**B** テレビの歴史としては白黒から始まり、フィルムからVTRへ、そしてカラーへ、最後は4Kと迫る。時代と人間、国家と人間、日本と南米の関係など、物凄く多くのことが語られている。異郷に生きるというテーマは中国の人が共鳴してくれそうだ。  
**C** 一人の人間が50年も同じ対象を追っているということに長動く、韓国の人も深い感銘を受けるだろう。アジア文化を越えたグローバルなものだ。  
**D** アニメでは広島で作ったBS1スペシャル8月8日放送「アニメ大好きなあなたへ、ヒバクシャからの手紙」。8月3日、ETV特集の「あの夏を描く～高校生たちのヒロシマ」は絵を描くことで被爆体験を継承する基

町高校の試みだ。  
**A** ヒロシマ、ナガサキに対して韓国、中国は否定的だが、この番組なら日本での非核の運動を伝えられるのではないだろうか。  
**B** ドラマでは日テレの「俺のスカート、どこ行った?」。これは加藤拓也という25歳の脚本家の脚本。日テレの伝統的な学園ものパターンだが、女装の古田新太が教師だ。  
**C** 気持ち悪い日本人を見せたくはないな。(笑い)  
**D** オネエ言葉とか、その手のドラマはNHKも含めて多い。  
**A** テレ東の「きのう何食べた?」が抵抗なく見られる。西島秀俊と内野聖陽。男同士の食への話だ。  
**B** LGBTについて中国、韓国はどうなのだろう?  
**C** ジェンダーについてもまだまだだから。ただ議論は起ころう。  
**D** 無難なところでは昨年の作品だが坂元裕二の「anone」。しかし、あれは1回だけではわからない。「Mother」や「Woman」ならわかるけどね。  
**A** 「ソフィテンスマン」はどっだ。「リーガルハイ」を書いた古沢良太の脚本。長澤まさみ、北村一輝の出演。中国、韓国でリメイクしていて、古沢良太は中韓でのリメイクを意識して書いている。そんな作り方がここまで現実化している。作品のレベルはそんなに高いと評価はできないが壮大な嘘のエンタメとして楽しめる。  
 —では、これくらいで—  
**座談会の次第**  
 日時・2019年8月31日(土)  
 午後2時～5時  
 場所・千代田放送会館3階会議室  
 出席者・伊藤雅浩、隈部紀生、菅野高至、鈴木嘉一、鈴木典之、西村与志木、藤久ミネ、逸見京子、吉田賢策

2019年8月・終戦関連特集(放送順)

2019/09/13

○8月3日(土) TBS・17時30分～

報道特集「原爆の記憶をどう伝えるのか」(30分程度)

出演:中根夕稀(RCCアナウンサー)、木村敬子(祖母・91)、木村良子(祖母の姉・93)、

○8月3日(土) NHKEテレ・23時～

ETV特集「あの夏を描く～高校生たちのヒロシマ～」(59分)

美術部の高校生(基町高校)が被爆体験を聞いて、10か月かけて、あの夏を描く。

語り:中川翔子、D:高山直毅、熊野律時、制作統括:上松圭、矢吹寿秀、制作著作:NHK広島

○8月3日(土) テレビ朝日・28時30分～

テレメンタリー「私は何者なのかー名前も奪われた原爆孤児」(30分)

D:平彩佳、P:上重三四郎、制作著作:広島ホームテレビ

○8月4日(日) NHKBS・22時～

BS1スペシャル「マンゴーの樹の下で ～こうして私は地獄を生きた～」(100分)

補助看護師部隊(131人)の生存者(80代～90代)の証言で綴るジャングルの地獄の逃脱行。

語り:仲里依紗、リサーチャー:田嶋瀬里音、取材:西山恵子、演出D:伊勢朋矢、D:伊藤亜由美、

P:伊藤純、制作統括:太田宏一、松永真一、制作:NEP、制作著作:NHK、※8月8日放送の特集ドラマとのコラボ企画。

○8月4日(日) NTV・24時55分～

○8月5日(月) NHKBS・21時～

BS1 スペシャル「ヒロシマの画家 四國五郎が伝える戦争の記憶」(100分)

<市民が描いた原爆の絵>元になった、四國五郎(1924～2014)の生涯をたどる。

語り：黒川智花、取材：相子貴浩、D：藤村奈保子、制作統括：田島徹、津田恭司、制作：NHKエデュケーショナル、制作著作：NHK

○8月5日(月) NHKG・22時～

NHKスペシャル「戦没者は二度死ぬ～遺骨と戦争～」(49分)

進まぬ遺骨収集、行われぬDNA鑑定、国策の移住にも拘わらず、人々は報われない……。

語り：松村正代、取材：中村雄一郎、福田和郎、本多ひろみ、松尾幸明、D：内山拓、制作統括：松本卓臣、木村真也、

○8月6日(火) NHKG・22時～

NHKスペシャル「“ヒロシマ”の音が聞こえますか ～生まれ変わった原爆資料館～」

被爆者無き時代に備えて、リニューアルした原爆資料館の新しい展示から原爆をたどる。

語り：中村倫也、杉浦圭子、D：安田哲郎、佐野剛士、麗直也、制作統括：樋口俊一、佐藤杉彦、制作著作：NHK広島

○8月7日(水) NHKBS・21時～

ドラマ「甲子園とオーバーと爆弾なべ」(59分)

1990年夏、沖縄水産高校が甲子園で決勝進出を果たした日、オーバーは妹の遺骨を探しに行く……。

出演：蔵下穂波、吉田妙子、平良進、佐久本宝、大城美佐子、満島ひかり

取材：内藤田美、柳橋啓子、脚本：中江素子、中江裕司、D：中江裕司、高野佳子、制作統括：茂木明彦、三浦尚、中村英美子、制作：NHKエデュケーショナル、制作著作：NHK、東京ビデオセンター

○8月8日(木) NHKEテレ・20時～、バリバラ「障害者×戦争」(リポート)

○8月8日(木) NHKBS・21時～

BS1 スペシャル「アニメ大好きなあなたへ～ヒバクシャからの手紙～」(50分)

NHK広島が、募集した手記「ヒバクシャからの手紙」(2200通)の中から3通をアニメ化。

番組ナビゲーター：清原果耶。D：山田香織、制作統括：米村裕子、上松圭、制作協力：NEP、制作著作：NHK広島

「ヤマンへの手紙」広島の陸軍幼年学校で製図作成に動員。原作：山本真理子(92)、脚本・絵コンテ・D：加藤達哉、

「あなたがいて、私がいて」体内被曝、8月17日生まれ。母の記憶を残したい。原作：川本初美(74)、脚本・絵コンテ・D：小野ハナ、

「父との別れ」原作：廣中正樹(79)、脚本・絵コンテ・D：黒木香那(広島大学)、アニメ制作：広島市立大学、

○8月8日(木) NHKG・22時～

特集ドラマ「マンゴーの樹の下で ～ルソン島、戦火の約束～」

出演：岸恵子・清原果耶、渡辺美佐子・山口まゆ、林遣都、大東駿介、安藤サクラ、伊東四朗

補助看護師部隊(131人)の隊長(清原)とハーブの同僚(山口)との逃避行と友情を描く。

脚本：長田育恵、D：柴田岳志、CP：佐野元彦、零石瑞穂、高橋練、制作：NEP、制作著作：NHK、テレパック

参考文献：岡田梅子「春菊よ谷のせせらぎありがとう」、若尾静子「サンパギータよ 永久に薫れ」、鴨野守「バギオの虹」、中野峰子「追憶」(「第七十四兵站病院」所収)

○8月8日(木) NHKG・25時～

「いのちのうたフェス～ヒロシマ・災害・復興～」(73分)

司会：吉岡里帆、D：川口誉、P：竹下健一郎、制作著作：NHK広島

○8月8日(木) NHKG・26時13分～

もういちど“長崎の原爆”みつめる「“焼き場にたつ少年”をさがして」(25分)

爆心から1.5キロ。ジョー・オダネルの写真『平和を見つめる少年』の、少年の行方を追う。

司会：渡辺健太アナ、語り：山本美穂、取材：富田良、D：渡邊英資、P：山中賢一、制作著作：NHK長崎

○8月10日(土) NHKG・21時～

NHKスペシャル「#あなたのすずさん～戦争×アニメ×青春～」(50分)

『らじらー!』(NHKラジオ第1)とのコラボ企画。戦争中の暮らしのエピソードを募集し、アニメ化して紹介。

キャスター:千原ジュニア、リポーター:八乙女光、伊野尾慧、出演:広瀬すず、片瀨須直、アナウンサー:近江友里恵、語り:松嶋菜々子、

○8月10日(土) NHKEテレ・23時～

E TV特集「忘れられた“ヒロシマ”～あの日を8万8千人が演じた～」

1953年制作の映画「ヒロシマ」(ベルリン国際映画祭で最優秀賞受賞)が辿った数奇な運命を描く。一人50円のカンパ・日教組50万人の支援で生まれるが、松竹は反米的だと自主規制し配給を拒否。

自主上映:小林一平、小林一開、コーディネーター:相川はづき、リサーチャー:床波ヒロコ、

編集:長山〇〇、D:宮脇壮行、P:竹田かをり、制作統括:渡辺隆文、矢吹寿秀、

制作著作:NHK大阪

⇒⇒8月16日(金) NHKEテレ・24時～

映画「ヒロシマ」(昭和28年) 脚本:八木保太郎 長田新編『原爆の子』より、D:関川秀雄、企画制作:日本教職員組合

出演:岡田英次、月丘夢路、山田五十鈴、市民8万8千人。©独立プロ名画保存会

終戦から7年後の高校・岡田英次のクラス、ある女生徒(病院に入院)の回想で……。

○8月10日(土) NHKBS・21時～

ドラマ×マンガ「お父さんと“私のシベリア抑留” 『氷の掌』が」(60分)

出演:木村多江、小手伸也、田根楽子、古谷一行、原案:漫画提供:おざわゆき、ドラマ脚本:開沼豊、岩瀬晶子、取材協力:講談社、

取材:宮田幸太郎、ドラマ演出:小山清史、D:櫻卓子、P:平体雄二、制作統括:前田英世、小山靖史、

制作:NHKエンタープライズ、制作協力:スタジオブルー

○8月10日(土) テレビ朝日・28時30分～

テレメンタリー「軍事機密の沈没船」(30分)

2800人が乗った陸軍の輸送船「日蓮丸」が北海道沖で米軍潜水艦の魚雷で沈没。その隠された真実に迫る。制作著作:東日本放送。

○8月11日(日) NHKBS・10時～

BS1スペシャル「幻の巨大空母“信濃”～乗組員が語る大和型“不沈空母の悲劇”～」(100分)

大和と武蔵の末弟・信濃の短い生涯を、元乗組員の証言でたどって行く。

関連図書:西崎信夫著、小川万海子編『「雪風」に乗った少年～十五歳で出征した「海軍特別年少兵」』、ナレーション:増谷康紀 佐藤利奈、

制作統括:渡辺圭、西部裕樹、P:長野高士、河田宣正、D:加藤誠、狩守(ぎんもり?)一弥、サポートスタッフ:吉村慶介、玉城歩、

制作スタッフ:豊吉美功、中村佳奈子、制作協力:共同テレビジョン、

○8月11日(日) TBS・14時～15時25分

終戦スペシャル「子供たちの戦争 関口宏×中学3年生 立教池袋中学・立教新宿中学」(85分)

戦争をどう伝えて行くか? 中学生十数名に関口宏(立教出)が戦争について問いかける……。

出演:関口宏、保坂正康(作家)、ナレーター:湯浅正美、

D:坂田一実、真鍋晋作、匂坂緑里、今井祐介、徳満宏、横山陽、演出:井出康行、番組P:金富隆、制作P:堤慶太、制作著作:TBS

○8月11日(日) NHKG・21時～

NHKスペシャル「激闘ガダルカナル 悲劇の指揮官」(50分)

無謀な戦いと言われる陸軍一木支隊(900人)は、米軍上陸部隊の囮として見捨てられた。

語り:林原めぐみ、取材:上島妙子、藤岡ひかり、D:佐々木浩人、秋山遼、制作統括:山崎啓明、制作著作:NHK

○8月11日(日) NTV・24時55分～

NNNドキュメント「19「海」は知っている。キャンパスはかつて特攻基地でした」(30分)

国立香川高専詫間キャンパスには、布張りの水上飛行機で特攻出撃した詫間海軍航空隊があった。

証言者:中原治史(98、海軍技術大尉) D:伊達典子、P:吉田剛、CP:小野修一、制作著作:RNC西日本放送。

○8月12日(月)BSフジ・12時～

終戦74年特別番組「落語家たちの戦争 ～禁じられた噺と国策落語の謎～」(118分)

戦時下から戦後にかけて、名人と呼ばれた落語家たちの苦難の軌跡をたどりながら、林家三平による「国策落語」の完全再現とともに、笑い戦争、「表現の自由」と「自粛」についても考察してゆく。

出演者：林家三平、海老名香葉子、ナレーション：三宅正治、西山喜久恵アナウンサー(フジTV)

演出・編集：天野裕充、伊世憲造、松村克弥、P：亀和夫、西村朗(フジTV)、

○8月12日(月)NHKG・18時05分～

ひとモノガタリ「曖昧な境界を生きて～“ハーフ”から見た日本のカタチ～」(30分)

池間昌人アナウンサー(母スイス人、父日本人)による“ハーフ”をめぐる旅。

語り・取材：池間昌人アナウンサー、D：村山瀬奈、P：(???)、制作著作：NHK沖縄

○8月12日(月)テレビ東京・20時～

池上章の戦争を考えるSP「一つのウソが息子たちを戦場へ」(114分)

護衛艦“加賀”を空母に改造し戦闘機を乗せる、ミッドウェー海戦で撃沈の真相に迫る。

召集令状にまつわる兵事係の逸話・参考文献：吉田敏浩著『赤紙と徴兵』

D：吉田広、岸憲人、樽見近エ、布施美邦、総合D：千葉隆弥、企画監修：廣瀬哲雄、P：鈴木享和、斎藤智礼、CP：大久保直和、統括P：野口雄史、制作協力：ダイナマイト、制作著作：テレビ東京

○8月12日(月)NHKG・22時～

NHKスペシャル「テロ、そして戦争へ～知られざる道程～」

小川平吉(治安維持法制定の司法大臣)が創刊した、天皇絶対視の『日本新聞』(1925～1935)の参戦への世論操作の道筋を追う。

語り：鈴木陽丈、朗読演出：佐古純一郎、リサーチャー：岩本善政、D：横里征二郎、山口智也、制作統括：三村忠史、藤原淳登、戸東久雄、制作著作：NHK

○8月14日(水)フジテレビ・26時50分～

FNSドキュメンタリー大賞「神か悪魔か」(25分)

戦犯の追及を免れた・辻政信(1902～1968、石川県出身)の半生を追う。

ナレーター：武田祐子、D：山本岳人、P：竹内章(石川テレビ)、制作著作：石川テレビ

○8月15日(木)NHKG・19時30分～

NHKスペシャル「全貌 二・二六事件～最高機密文書で迫る～」(74分)

海軍軍令部が記した『2・26事件の全記録』をもとに。事件の全貌に迫る。

取材：宮原修平、山口健、再現パートD：堀切園健太郎、ドキュメンタリーパートD：右田千代、神津善之、P：吉田好克、制作統括：松本卓臣、草ヶ谷達也

○8月17日(土)NHKG・21時～

NHKスペシャル「昭和天皇は何を語ったのか・初公開・秘録『拝謁記』」(60分)

初代宮内庁長官・田島道治が1949年6月から5年間、昭和天皇に拝謁したときの日記から再現。出演：片岡幸太郎、橋爪功、

語り：広瀬修子、取材：鈴木高晴、吉見直人、再現演出：佐古純一郎、D：小林亮夫、岡田亨、制作統括：塩田純、杉田陽介、梅原勇樹

○8月17日(土)NHKBS・22時～

BS1スペシャル「WAR BRIDE 戦争花嫁たちのアメリカ」(100分)

進駐軍と結婚してアメリカで生きた4万人の日本女性。90歳近くになった彼女たちの証言。取材：大岩棣、D：小柳ちひろ、P：藤田英世、

制作統括：齋藤圭介、太田宏一、鐘川崇仁、制作：NHKエンタープライズ、制作著作：NHK、テムジン、

○8月17日(土) NHKEテレ・23時～

ETV特集「少女たちがみつめた長崎」(59分)

女学生たちが見た原爆、『工場日記』が語る長崎女子学徒隊の被爆の記録。

語り：鹿島綾乃、出演：長崎西高校放送部、生来有一(作家)、平野啓一郎(作家)、故・林京子(作家)、

取材：清水亮詞、光武直美、D：渡辺孝、制作統括：石田涼太郎、東野真、制作著作：NHK福岡。

○8月18日(日) NHKG・21時～

NHKスペシャル「戦争と“幻のオリンピック”アスリート知られざる闘い」(50分)

1940年中止となって、スポーツが失われて行く時代、松澤一鶴の物語。

取材：山登義明、前田芳秀、D：篠崎貴志、中元健介、制作統括：森田昭、大鐘良一、吉田宏徳、制作：NHKグローバル・メディアサービス

○8月18日(日) NHKBS・22時～

BS1スペシャル「隠された戦争協力～日本人と朝鮮戦争～」(100分)

「米軍による日本人(70人)の尋問記録・1033ページ」がアメリカ公文書館で発見される。激闘に参加し敵兵を殺した証言者に取材する。

語り：本田豊子、再現パート演出：石川二郎、D：藤原和樹、制作統括：松本卓巨、鈴木達也、

○8月18日(日) NTV・24時55分～

NNNドキュメント'19・シリーズ平成「平成ニッポンを歩く 報道カメラマン80歳 日本縦断・西日本編」(30分)

石川文洋(80～81)が、宗谷岬からふるさと沖縄までを歩く。その西日本編。ナレーター：小山英美、朗読：松本光生、

撮影・D・編集：大小田直貴、P：村松宏美、高世仁、CP：有田康紀、制作協力：ジン・ネット、制作著作：日本テレビ

○8月18日(日) TBS・25時20分～

JNNドキュメント ザ・フォーカス「米軍が最も恐れた男 カメジロー祖国の風」(30分)

瀬長亀治郎の戦いの半生。語り：山根基世、取材・構成：佐古忠彦、制作著作：TBS

○8月22日(木) NHKBS・24時～

にっぽんぐるり『きんくる～沖縄金曜クルーズ～「沖縄戦74年“ひめゆりの想い”令和へ』

「ひめゆり平和祈念資料館」が開館30年を迎え、戦後生まれの館長の下、リニューアルを計画、その課題を考える。

出演：津波信一、MEIRI、アナウンサー：池間昌人、ゲスト：普天間朝佳(館長)、北上田源(琉球大学講師)、

映像出演：本村つる(96・元館長)

○8月24日(土) NHKEテレ・23時～

ETV特集「三鷹事件 70年後の問い～死刑囚・竹内景助と裁判～」

2018年12月、竹内景助の次男・健一郎(76)が顔出し不可で取材に応じ、請求棄却の判決後(2019年8月)の取材では、隠れている自分に腹が立って嫌になったと、顔を出して取材を受ける。

語り：中条誠子、リサーチャー：岩本善政、柳原緑、D：小林亮夫、制作統括：塩田純、梅原勇樹、制作著作：NHK、

○8月24日(土) テレビ朝日・28時30分～

テレメンタリー「史実を刻む一語り継ぐ『戦争と性暴力』」(30分)

岐阜県黒川村の満蒙開拓団は生き延びるため女性を「性接待」に提供する。悲惨な史実を後世に伝えるため石碑を建立する。

D：松原文枝、P：東卓夫、制作著作：テレビ朝日

○8月27日(火) NHKEテレ・20時～

ハートネットTV「隠して生きるしかなかった～ハンセン病家族の知られざる被害～」(29分)

『ハンセン病家族訴訟』が原告勝訴で決着。国の無策による、患者家族への激しい差別の実態に迫る。

出演：徳田靖之(弁護士)、黒坂愛衣(東北学院大学准教授)、司会：〇〇アナ、

8月のNHKラジオから戦争を  
考える 三原治

74年前の8月に悲惨で残酷な戦争は終わった。あの戦争を教訓とし再び同じ過ちを繰り返さないために8月は「戦争と平和」について考える。

74年前 テレビはまたなかったが、ラジオは新聞と共に主要なメディアだった。そして戦争のプロパガンダに加担した。その加害者でもあるNHKラジオには「戦争と平和」を伝える義務と使命がある。

今年の戦争関連の特別番組は、さすがNHKラジオというべきラインナップで、3本のラジオドキュメンタリーと1本のラジオドラマと2本の朗読番組が放送された。すべては紹介しきれないので、ドキュメンタリーだけ簡単に振り返る。

## 「ロシヤ」を語るお好み焼き店

8月5日(月)午後10・05～10・55

ヒロシマを外国人観光客に正しく伝えたいと模索するお好み焼き店主らの日々を追った作品。グアテマラ出身のフェルナンド・ロベズ(56)さんは、内戦に荒れる母国を離れ、日本人と結婚した。義理の母は被爆者だ。彼の店を訪れたのは、アメリカ出身のポピオ・メアリー(27)さん。被爆者について学び、深く知りたいたと広島に来て3年がたつ。外国人である2人が、平和への思いを正しく伝えたいと葛藤し、模索する日々を追った。世界中からやってくる人たちにヒロシマの思いを伝えたいと考えているが、原爆を落とした側のアメリカ人という立場でどうやって平和の心を伝えれば

いいか悩んでいる。メアリーさんは、被爆者の証言を聞くなど、平和文化の研究を続けている。いま、原爆資料館を訪れる外国人観光客は43万人余りで、6年連続過去最多。世界中の人々に被爆の実相を、いかに伝えるかが課題となっている。

「命の響きに耳を澄ませば」原爆の図 か  
ら生まれた紙芝居

8月6日(火)午後10・05～10・55

今年5月、画家の丸木位里・俊夫妻が生前に描いた大作「原爆の図」をモチーフにした紙芝居が誕生した。脚本は米国出身の詩人、アーサー・ビナード(51)さん。埼玉県東松山市にある「原爆の図 丸木美術館」で新作紙芝居「ちっちゃいこえ」の公演が行われた。試行錯誤を繰り返して7年がかりで、16枚構成の紙芝居「ちっちゃいこえ」を完成させた。ビナードさんは、広島を訪れ原爆ドームの側に立ち「原爆とは何なのか」を考え始め広島平和資料館で「ピカドン」という言葉を知る。それがきっかけで広島に移り住む。詩人のビナードさんは、日本語の視点で原爆に「さわる」「原子爆弾は新しい殺し方。サイボウを壊すものが空から土に潜り込む」と語り、「きみのサイボウはげんきかい？」と問いかける。作品を通して新たな表現で際立つ「原爆の図」のメッセージを伝える姿は圧巻である。番組では、「原爆の図」をもとにした紙芝居『ちっちゃいこえ』について、脚本を手がけたアーサー・ビナードさんに三宅民夫キャスターがインタビューをしている。

「平和への願い 歌に込めて」移住者が向き  
合ったナカサキ・ホームロッド

8月9日(金)午後10・05～10・55

被爆74年となる今年、長崎原爆の日を前に「平和を願う歌」の制作に取り組む人たちに焦点をあてた。長崎市の離島・高島に住む男女

5人の音楽グループ「RAINBOW MUSIC(レインボーミュージック)」。メンバー全員が、東日本大震災をきっかけに長崎へ移り住み、それぞれ仕事をしながら、長崎や福岡を中心に音楽活動をしている。これまで、8月9日には長崎駅近くの広場で開かれる平和を願うコンサートに参加してきた。そうした中、地元の人から「被爆地長崎のために平和を願う歌を作ってほしい」と頼まれ、曲の制作を考え始めた。全員が戦争の経験をしておらず、長崎の原爆被害について詳しく知らないメンバーたちが、被爆者をはじめ長崎の人達から学び、曲を作る様子を伝えるラジオならではのドキュメンタリーに仕上がり、平和への願いを込めた歌が心に響いてくる。

戦争特番を作り続けるNHKラジオには敬意を称する。伝え続ける意義は大事なことだ。しかし、戦後74年、戦禍を経験した人は減り続けている。戦争の記憶を伝える語り部も90代を越えてきた。戦争は遠い過去となり、若者に広がる「人ごと」感は否めない。戦争の犠牲者は、日中戦争後に戦死した軍人・軍属230万人と空襲、原爆、沖縄戦で亡くなった民間人を含めると310万人に上る。しかしこれは被害者意識だ。日本が侵略した近隣諸国や交戦国の犠牲者はとんでもない数となる。加害者意識のない反省は無駄である。特に今の安倍政権は、「加害と反省」を言及しなくなった。それが放送にも影響している。安倍政権に付度するNHKニュースは、政府に都合の悪いことは取り上げない。民放ではTBSテレビ『サンデーモーニング』『報道特集』やTBSラジオの『森本毅郎スタンバイ』はきちんと伝えていくが、他の番組はほとんどがNHKと同レベルである。

これからは、どう伝えていくかが問題である。戦争を語れば、それでいいものではない。

いつまでも被害者意識だけで戦争を語り継ぐかぎり、戦争はまた繰り返される。井上ひさし氏の芝居には、いつも観客に突きつけるものがある。戦争に巻き込まれた国民は被害者ではない。鬼畜米英と国中が戦争に突入した国民も加害者である。問いかける。その加害の反省があつて、戦争を回避する意識を戦争を経験しない世代にどう伝えていくかである。(放送人の会理事・日芸芸術学部放送学科非常勤講師)

## 生涯ラジオ好きだった父の思い出

大類なぎさ

「お前、いいラジオを持っているな」  
2012年秋、故郷山形でのことだ。ギョツとした。貸したら最後まで壊される。

呑み会の景品でもらった、SONYのICF・51。私が愛用する、手のひらサイズの白いコンパクトラジオ。FMとAMしか入らないがどこでも持ち歩けるし、音もいいからいつも手元に置いている。当時私は、毎朝目を覚ましてから通勤前まではYBC(山形放送)の「グツとモーニング」を、夕食後寝る前まではニッポン放送の「オールナイトニッポン」を聞いていた。

それを父に見つかったのである。  
「貸さないよ」はつきり断った。

「じゃあ、共有。これはもつと嫌だ。」  
子どもの頃から、テレビを見ていけば「考えない大人になる」と消されるか、NHKにチャンネルを強制的に変えられる。車のラジオで音楽を聴いていけばナイターに切り変えられる。

ラジオは結局父のものになるだけだ。  
悉く断られてしょんぼりしていたが、諦めるような父ではない。

「じゃあ、誕生日に同じもの買ってくれ」

それならば……と全く同じものを父に買った。2000円ほどのラジオだ。それを母と妹と3人で割り勘にして買った。贈る側としてはかえって安上がりである。それでも父は自分のものになったラジオを子供のように喜んで毎日肌身離さず持ち歩いては聞いていた。

以後、我が家には全く同じラジオが2台ある。生前父は、よくラジオを叩いていた。

ラジオの電池が切れかけて、音が聞こえにくくなると決まって叩き出す。しつこく叩かれた衝撃で、本当に壊れてしまったラジオは数えきれない。

「FMとAMさえ入れれば十分なのに、今のラジオは様々な機能がついているから脆い」壊れる度にラジオのせいにして怒り出す。

そしてその度に買い物の嫌いな父は、妹に新しいラジオを買いに行かせた。「物を大切にしろ」と人には散々言っておいて……と、妹もまた文句を言いながら買いに行く。

だが父は、2015年3月に癌で亡くなる最期まで言わなかった。

「もう、ラジオはいらない」と。生涯父はラジオ好きだった。というよりもラジオは父の「体の一部」だったのかもしれない。

台所に立つ時、食事の時、風呂に入る時：常にラジオはつけっぱなしだった。

もともと父は、ラジオで育った世代でもあるし、山形放送在職中はサツ（警察）回りが長かった。夜討ち朝駆けで不規則な生活が長く、テレビや新聞をゆつくり見る時間が許されなかったからだろうか。

「ラジオはテレビと違って地味だが、どこにでも持ち歩いて耳学習ができる」

父の口癖だった。確かに山形では、農家は早朝から一日中、外

でラジオをつけっぱなしにして働いている。トラックやタクシーの運転手は、随時交通情報が入るようラジオをつけている。夜のタクシーの運転手はお客さんとの会話の繋ぎのために、よくナイターをつけていた。

父が亡くなる一年前の、癌が転移し始めた頃からだろうか。「画面の刺激が強すぎて目が辛い」とテレビを遠ざけるようになった。

故郷澤明監督の映画「夢」のような美しい映像を求めて番組を制作してきた父にとつて、テレビは欠かせない存在だったはず。それだけに、余程のことだったのだろうと思う。

テレビから離れた父は、ラジオにしがみついた。夜布団に入ってから、一晩中音量をあげてラジオをつけていた。聞いていたのはNHKの「ラジオ深夜便」だったと思う。暗闇の中、眠れないことが多かったのか、ラジオの音は何よりの安定剤のようだった。

そして息を引き取ったとき、ラジオは止まっていた。スイッチが「ON」になったままで。その時電池を入れ替えた瞬間の驚きは今でも忘れられない。最高ボリュームのまま、電池が切れていたのである。

意識を朦朧とさせながらも必死にラジオを叩いていた父は、その音で自分がまだ生きていることを確認していたのだろうか……

父がラジオを叩く理由を初めて知ったのは、亡くなって4年が過ぎた今年5月のことだ。

放送人の会総会・放送人グランプリ贈賞式後の懇親会の時のこと。ラジオプロジェクト担当の方に父が「ラジオ好きなのに叩いて壊す」話をした時に、その理由があることを聞いて嘩然とした。当時何も理解しようともせず、その父を「乱暴だなあ」と怒りさせた自分だ。そして悔やんでいる。

つまり、昔のラジオは真空管で出来ており、それを電源に差し込むと接触不良を起こして

音が聞こえにくくなる。だから叩いて接触を復活させ、音が聞こえるようにするというのだ。

父がラジオを叩く理由はちゃんとした。彼が亡くなる直前まで叩いていたSONYのあのラジオは、今も健在である。

けれど電池が切れかけて音量が小さくなくても私たちはこのラジオを叩かない。何故なら、叩いて本当に壊れてしまったら、ラジオを大切にしていた父の存在が、その音と共に消えてしまうような気がするからだ。

(放送人の会会員・総務省非常勤職員)

### 泉麻人「元談音楽の怪人・三木鶏郎」 ラジオとCMソングの戦後史を 読む

木原 毅

私事で恐縮だが、TBSが出している『調査情報』（隔月刊）に新刊紹介の駄文を掲載させてもらっている。『調査情報』が復刊してまもない頃からだから、20年近く続いていることになるのか。若い現場の人たちに読んでもらいたいという視点で本を選んで、感想文めいたものを書き連ねてきた。

最新号（9月1日発売号 赤坂の金松堂やAMAZONでお求めいただけます）で紹介したのが泉麻人の『元談音楽の怪人 三木鶏郎ラジオとCMソングの戦後史』（新潮選書 2019年5月刊、税別1500円）。鶏郎については「放送人の会」の皆さんには改めて説明する必要はないだろう。

『調査情報』誌では紙幅の都合で触れることができなかったが実はこの本、文化放送の特派員がきっかけで生まれたものだ。泉はあとがきでこう書いている。――「三木鶏郎のことを書いてみたい」と思っていたときだけは、生誕100年にちなんだラジオ番組「三木鶏郎の世界」（文化放送2014年）の進行役を任

されたことだった。「日曜娯楽版」（元談音楽）やCMソングの音源、関係者の談話（また永六輔さんもお元気だった）を流しながらトリロの仕事とその時代を解説してゆく特別番組でも書きとめておきたいものだ……と痛感した――同年12月23日の放送だということだが、残念ながら僕は聴いたことがなかった。

新人類代表でメディアに登場することも多かった泉麻人も64歳。特番の放送のあと、野坂昭如、永六輔と鶏郎門下生が相次いで鬼籍に入ったことも今回の執筆の大きな動機になっているよう。また名声を得てからの姿は鶏郎自身の回顧録や、門下生たちのエッセイや小説などで知られているが、出生から青春期、全盛期、晩年まで通しての評伝は本書が初めてのことらしい。戦後の芸能史にとつても貴重な一冊になるだろう。

ハイライトはやはりNHKラジオ「日曜娯楽版」の黄金時代だが、当時の放送がかなり自由闊達でしかも鷹揚でありながらジャーナリズムを担う者としての矜持を忘れていなかったことがうかがえる。最近二部の筋では、自虐史観なるものを敗戦国民に植え付けるようなプログラムがGHQにあつたとする陰謀論がもてはやされているそうだが、なんのなんの鶏郎の番組を支持し楽しんだ人々にとつてそんな気配はみじんもない。したたかにしなやかに生きていたことがわかる。また鶏郎番組にハマって今で言う「ハガキ職人」になっていた人たちのなかには意外な顔ぶれも。例えば作家・川上弘美の美父も大学に通いながらせつせと番組宛に時事コメントを投稿していたという。

さて『調査情報』一用の原稿を書き終えた頃、「放送人の会」の打ち合わせで理事の田中秋夫さん（文化放送OB）に会う機会があり、

もし音源が残っていれば特番『三木鶏郎の世界』を聴いてみたいとお願したところ、「これは私持つてます」と思いがけない言葉。さらに田中さんとの話のなから、「自身も鶏郎門下の元談工房研究生の経験もあることが判明した。そして数日後には同録CDが届き懐かしい鶏郎の音楽や貴重なCM作品を存分に楽しむことができた。

番組は泉麻人とアナウンサーの鈴木純子が進行を担当、ゲストで構成も担当した濱田高志(はまた・たかゆき、この人51歳ながら、戦後の音楽やポップカルチャー全般に詳しく、浜口庫之助やミッシェル・ルグランの作品の研究者でもあるという)の三人が、関係者のインタビューなどを挟みつつ鶏郎の足跡をたどるオーソドックスなものだが、作詞家伊藤アキラ(もちろん彼も門下生)のインタビューコメント「鶏郎さんは音になる言葉を選んでいった。音楽に乗る言葉を常に探していた。日本語のサウンド化を目指した先覚者。日本語のロックを目指していた大瀧詠一さんは(鶏郎に)大きな興味を抱いただろう」が光る。本書もこのあたりの論考にページが割かれており、大瀧のハッピーエンド時代の仲間・細野晴臣が「僕は特急の機関士で」からインスパイアされた楽曲を作っていたとか、さらにその曲のコーラスを担当した山下達郎も細野の本歌取りがわかっていたとか、泉麻人ならではのこだわりが三木鶏郎の多才さを深掘し興味深く読める一冊になっている。

**放送人の会ラジオプロジェクト・監修後**

**第76回放送人句会**

令和元年8月6日(火) 於 赤坂・麦屋

出席 星野高士  
伊藤寛郎 林備後 鶴橋康夫 佐々木光野  
深尾一化 近藤久二、沼田道嗣(初参加)  
以上8名

兼題 七夕一切、初秋、終戦の日、ピンスポ(業界用語)

「星野高士特選」

名月のピンスポ浴びて帰る夜

終戦忌いつもと違う紅を指す

七夕の竹を添へあり繩のれん

初秋や妻の白髪の色染め具合

終戦の日の青空も色褪せて

ピンスポが消えて舞台は虫の声

七夕の短冊一字恋と書く

北新地故郷に帰らず来た初秋

「星野高士選」

ピンスポットに搦めとられて秋の蝶

戦争の終わった夜も麥の飯

風入れて街騒を聞く初秋かな

天の川逢ひたきひとを指に折る

初秋の飲み放題のビールかな

津波より九年目仙台七夕

銀漢のうらもおもても廻るよる

科学でも雨は止まない星まつり

初秋の風鳴き分くる女将かな

初秋の煙に泡を一気飲み

安倍一強遠ざからずに終戦忌

いつの間に終戦の日も老いたるか

わが願ひいま銀漢のどの辺り

潮引きて初秋の岩場靴ひとつ

ピンスポの日矢ヒロシマの蟬時鳥	光野	ちよつとだけよピンスポットの盆狂言	一化	負ぶれた背で泣く義母に秋初め	康夫	何ひとつ思ひ出はなく終戦日	備後	夏フェスのピンスポ次はゆずの番	視郎	初秋の川悠々と流れ行く	視郎	「会員互選」	
花りんごの濡れて涼しき終戦忌	康夫	戦争の終わった空の広さかな	視郎	一寸だけよピンスポサックス夏休み	久二	光でも十万人のミルキーウェイ	道嗣	終戦のラヂオと柱時計かな	備後	終戦忌もう廊下には立たせない	光野	終戦の日父母は生き抜き産み育て	光野
七夕や駆駆けあがる藍浴衣	康夫	「選者吟」	星野	終戦日都電の音の抜ける空	高士	一献に一品足らず終戦日		初秋の曲り損ねし街の角		初秋の本の葉の裏は白		ピンスポの光り届かぬ街初秋	
うづくまる鳩の背円し終戦日		七夕や言ひ足らざるが丁度よし		次回放送人句会		〇令和元年10月1日(火) 17時半頃から		投句締切18時半		〇会場 赤坂・麦屋		〇兼題 冬近し 月一切 きりたんぼ	
振付け(業界用語)				新任理事就任挨拶		2年前の5月に入会し、昨年の総会で事務局		長に、今回、理事に選任されました。決意を新		たにして、会の仕事に取り組みたいと思いま		す。(という書きぶりになっているのは、明日	
						9月11日の内閣改造を前にした「ニュースウ		オッチ9」を見ながら文字を打っているせい		かも知れません。)		1975年4月にNHKに入り、予算編成に	
						携わったのちに、局内の横断的組織として創		設されたハイビジョン特別プロジェクトに参		加し、郵政省放送行政局衛星放送課ハイビジ		ョン推進室の一員として仕事をしました。そ	
						の後、国際メディア・コーポレーション(MI		CO)のニューヨーク現地法人、海外企画局		(映像国際放送実施プロジェクト)、放送文化		研究所(メディア情報部、「20世紀放送史」編	
						纂室、計画)、放送博物館などに勤務しました。		そうした経歴を会の活動に生かしていかれた		らと思っています。		なお、長年にわたり、メディアに関する雑文を	
						書いておまして、現在は月刊『通信文化』公		益財団法人・通信文化協会、発行部数約6万2		千部に「放送の100年へ 1920→20		20」というエッセイを連載しております。	
						この10月には43回を数えます。毎年、「放送		人グランプリ」の時期には3回にわたってそ		の特集的な内容にしています。これからも、広		報委員会の別動隊のつもりで、PRをしてま	
						いりたいと思っています。		長くなりました。引き続きよろしく願ひ申		し上げます。			

**補遺**

(千葉さんのご事情で前号に掲載できなかったものです)

**新任理事就任挨拶**

千葉邦彦

- 【あ】藍澤幸久 相田洋 相本芳彦 青木裕子 青山悌三 秋田和典 秋山豊寛 天野證範 雨宮望 新井和子 【い】池田正之 石井彰 石井ふく子 石橋映里 石橋冠 石原信和 磯智明 板谷駿一 市岡康子 市川哲夫 市村元 伊藤博文 伊藤雅浩 井上佳子 井上良介 今井義典 岩澤敏 岩瀬弥永子 【う】上村忠 浮田周男 碓井広義 臼杵敬子 【え】江川雄一 江口展之 遠藤利男 遠藤雅充 【お】大池雅光 大川光行 大蔵雄之助 大沢悠里 太田昌宏 大原れいこ 大類なざさ 緒方陽一 岡野真紀子 岡室美奈子 岡本勉 小川治 小川和之 小河原正巳 沖野暁 萩野慶人 尾田晶子 織田晃之祐 【か】加賀美幸子 柏木登 片岡敬司 加藤滋紀 加藤拓 加藤義人 金平茂紀 加納孝夫 川平朝清 鎌内啓子 亀谷弘美 鴨下信一 川喜田尚 川口健一 川淵恵子 河邑厚徳 【き】北川泰三 北川信 北川祐美香 北出晃 北村美憲 北村充史 木下浩一 木原毅 木村成忠 【く】工藤卓男 工藤英博 隈部紀生 倉内均 訓覇圭 黒崎博 黒沢淳 【こ】小池勝次郎 河野尚行 小玉滋彦 後藤和晃 小林和男 小山帥人 近藤一男 近藤邦勝 今野勉 【さ】斎藤秀夫 斎明寺以玖子 寒河江正 坂元良江 桜井均 桜井元 佐々木彰 佐々木光政 笹山正勝 佐藤敦 佐藤幹夫 佐藤理恵子 佐野有利 澤田隆治 【し】重延浩 重村一 重盛政史 静永純一 志津木敬 四宮康雅 柴田陽一郎 嶋田親一 清水誠 志村一隆 下崎寛 下重暁子 白井博 新山賢治 【す】菅野高至 菅野嘉則 杉田成道 鈴木俊樹 鈴木典之 鈴木弘貴 鈴木嘉一 須磨章 【せ】清野豊 関佳史 せんぼんよしこ 【そ】曾根英二 【た】高島秀之 高田宏 竹中一夫 武本宏一 田澤正稔 田中昭男 田中秋夫 田中直人 田中典子 田中則広 田原茂行 【ち】千葉邦彦 【つ】塚原あゆ子 塚本茂 塚本幹夫 辻本昌平 土屋敏男 つボイノリオ 露木茂 鶴橋康夫 【て】寺島高幸 【と】東城祐司 堂本暁子 戸田桂太 外崎宏司 富沢一誠 豊原隆太郎 鳥谷規 【な】長井展光 中尾幸男 中込卓也 中崎清栄 中島僚 中島由貴 永田浩三 永田俊和 永野敏一 中町綾子 中村敦夫 中村克史 中村季恵 中村美美子 中山和記 並木章 【に】新村もとを 西憲彦 西村与志木 仁田豊文 仁藤雅夫 二宮文彦 【ぬ】沼田通嗣 【の】延江浩 信井文夫 【は】萩原豊 林健嗣 林宣昭 林安二 原由美子 原田令嗣 【ひ】日笠昭彦 玄武岩 【ふ】深尾隆一 藤井チズ子 藤井正博 藤田知久 藤久ミネ 藤村忠寿 【へ】逸見京子 【ほ】堀川とんこう 【ま】前川英樹 牧之瀬恵子 増山麗央 松尾羊一 黛りんたろう 【み】三上義智 水上毅 水野憲一 光原朋秀 三原治 三村景一 三村千鶴 宮崎洋 宮川鑪一 三宅恭次 【む】村上光一 村上雅通 村上佑二 村田亨 【も】本木敦子 元田成 諸橋毅一 【や】八木康夫 矢口久雄 矢島良彰 数内広之 山鹿達也 山崎隆保 山崎裕 山路家子 山田尚 山田良明 山根基世 【よ】吉澤保 吉田賢策 吉村豪介 吉村直樹 【わ】若松央樹 和崎信哉 渡辺浩平 渡辺紘史

【賛助会員】 日本民間放送連盟 TBSメディア総合研究所 融合研究所 日本ケーブルテレビ連盟

新人会員紹介 (入会日順・敬称略)

川淵恵子 (かわぶちけいこ) 52年8月生。

「お昼のワイドショー」テレビ公開捜査テレビホンガール、「天才たけしの元気が出るテレビ」番組デスク、「ロンブー龍(ロンドンブーツ1号2号)」番組デスク、「ぐるぐるナインティナイン」番組デスク。2002年、日本テレビ編成局長から協力スタッフ特別顕彰を受ける。

元田成 (もとたせい) 53年5月生。

日本テレビ社会部、政治部、「ニュースプラス1」きょうの出来事を経てロンドン支局長、NTVアメリカ社長、現在、白鷗大学特任教授。

編集後記

一度は発行しないことになりましたが、何とか発行にこぎつけました。今年度の終戦特集番組は例年以上の量で、消費夏座談会、は読みごたえのあるものになったと思います。▼日韓中フォーラムの中国大会が突然決まり、参加番組を選ぶのにこの座談会の場を借りたため、あちこちに話が飛んでいる座談会になりましたが、あえて話題をまとめるような整理をしませんでした。座談会に同席している気分を読んでいただけは幸いです。▼終戦特集は番組名が長く、更にサブタイトルが長く、新聞のラテ欄のタイトルと放送各社が作っているホームページのタイトルが違います。これは終戦特集に限らず、スペシャルのタイトルも同じです。新聞のラテ欄は放送局が出してくる決定番組表をみて適当にカットしたり省略したりして作ります。かつて民放のバラエティー番組などのタイトルは!!なんどの記号を多用し、ラテ欄ではほとんど削られました。この会報では番組タイトルは原則として放送局のホームページをみて掲載しました。省略が少しありますので、引用なされる時は確認してください。▼令和を機に皇

室関係の報道、番組がふえました。皇室用語は使い方が微妙です。官邸では有識者会議を開いて、「上皇陛下」「上皇皇后陛下」と呼称を決めました。新聞、放送はこれに従っていません。新聞協会用語懇談会放送分科会編の「放送で気になる言葉 敬語編2019」を今年3月の発行し天皇退位に対応して皇室用語を充実させました。放送分科会は各社のアナウンサーの人がメンバーで、各社の報道中心の皇室用語への対応は別です。既に各社それぞれに決めています。内部資料だそうです。座談会での皇室用語はいろいろでしたが、発言そのままに記録しました。▼日韓中フォーラム中国大会が貴州省興義に決まりました。辺境の地で皆さん馴染みがないと思いましたが、案内のページを1ページ、カラーページで作りました。カラーコピーは高価なのですが、今回コピー屋のKinokoが3周年で定価の半額の感謝クーポンを送ってくださったので、いつもと同じくらいのコピー代でできることになりました。このページの写真は菅野高至さんと深尾隆一さんの提供です。▼中尾佐助などが唱えた照葉樹林文化論の中心地は雲南省、貴州省で、貴州省には餛飩、麴酒、入れ墨など日本と共通する文化がみられます。サクラはネパール原産で貴州省を経由して日本へ来たとの説があります。また、少数民族トン族には昆虫食の習慣があり、水棲昆虫のヤゴ、タガメなどをエビと一緒に串に刺して炭火で焼いて食べ、蜂、蚕の蛹、イナゴ、セミ、カメムシなどを食べさせる食堂があります。行くといろんな発見がありそうです。どうか多数ご参加のほどを。▼台風15号の影響で千葉県停電がまだ続いています。今年は大雨による災害が多発し、災害報道への注目度が増しています。放送人の会で天気予報、災害報道をテーマにシンポジウムを企画できませんか。(祝)